平成 22 年度 大学生の就業力育成支援事業

「就業力向上を目指す社会貢献支援プログラム」

～初年次からリカレント教育まで質の高い幅広い職業人養成を行う～

社会貢献フォーラムⅠ

社会に貢献できるリーダーを育てる

報 告 書

平成 23 年 3 月

公立大学法人 福岡県立大学

目　次

ごあいさつ …… 1

事業紹介と今後の取組 …… 2

特別講演 …… 12

基調講演 …… 19

つくしんぼ …… 32

てんぷらあいす …… 37

たけのこサークル …… 42

献血推進サークル …… 46

ハンドポスト …… 51

ＴＡ活動（養護教諭を目指して）…… 55

ＴＡ活動（日本の小学校を体験）…… 58

少年サッカー指導 …… 62

社会貢献論演習 …… 66

社会貢献フォーラムⅠの写真 …… 72

学生からよせられた感想 …… 77

外部参加者及び教職員からよせられた感想 …… 79

発表を終えて …… 83

ご あ い さ つ

福岡県立大学理事長・学長
名和田 新

ご紹介いただきました福岡県立大学学長の名和田でございます。

本日は、社会貢献フォーラムに、ご多忙の中にもかかわりませず来賓の皆様をはじめ、多くの皆様にご出席いただきまして心より感謝申し上げます。

「社会貢献できるリーダーを育てる」のフォーラムの開催にあたりまして、一言、挨拶をさせていただきます。

現在、我が国の若者は非常に内向き志向でございます。学校と社会を繋ぐ複線コースが必要であり、海外体験を含め企業人になる前に社会に向き合わせることが強く求められています。文部科学省は、学生の就業率の厳しい状況の中で、学生の資質及び能力の向上に対する社会からの要請や地域社会の変化を踏まえた就業への要請に応えるために教育課程の内外を通じた社会的・職業的自立に向けた指導を制度化し、平成 22 年度に「大学生の就業力育成支援事業」を公募しました。

私たちの大学は地域とともに歩み、地域とともに作る大学であります。教育研究に加えまして、社会貢献は私たちの大学の大きな柱の一つであります。地域の皆様の支援によりまして、本学の学生の 70%がボランティア活動を経験しているという素晴らしい伝統があります。私たちの大学の小松教授がプロジェクトリーダーになり、ボランティア活動の伝統を教育に取り込むため、4 年間にわたり実績をだし準備され、「就業力向上を目指す社会貢献プログラム」が 4.1 倍の競争に打ち勝ち、選定されました。5 年間続く事業であります。

この審査員の評価は、本事業を学生の教育や進路形成のあり方を再構築する教育改革と位置づけ、就業力仕様に基づいた学生の現状分析の結果から、4 年間にわたる体系的教育課程が構築され、2 学部間の連携を前提とした専門性の高い特色ある取り組みで、他の大学への普及効果も期待できるとあります。私たちはこのプロジェクトを、本学の教育改革の基盤として今から進めていきます。

本日は 22 年度のまとめのフォーラムでございます。プロジェクトリーダーの小松教授に事業紹介と今後の取組について話していただきまして、安藤氏より特別講演を、関戸氏より基調講演をいただきます。この場を借りまして心より感謝を申し上げます。よろしくお願い申し上げます。そして、学生の自主的なパネルディスカッションを行いまして、最後に両学部長より総評していただきます。

それでは今から開催させていただきます。

よろしくお願い申し上げます。

事業紹介と今後の取組

就業力向上支援プログラム推進会議委員長
小松 啓子 教授

ただ今ご紹介いただきました福岡県立大学の小松啓子でございます。宜しくお願い致します。早速ですがパワーポイントを使いながら、お話を進めさせていただきます（図 1）。

文部科学省は、学生の就業率が厳しい中で、学生の資質能力の向上に対する社会からの要請や地域社会の変化を踏まえた就業への要請に応えるため、教育課程の内外を通じた社会的・職業自立に向けた指導を制度化しました。そして平成 22 年に「大学生の就業力育成支援事業」を公募致しました。4 年間にわたり準備してきました本学の学生のための「就業力向上を目指す社会貢献支援プログラム」が選定されました。本当に嬉しく思っています（図 2）。

福岡県立大学人間社会学部は平成 4 年に開学しました。それから約 10 年後に看護学部が開設されました。その間、福岡県立大学は敷地面積からすると 3 万平方から 9 万平方、わずか 10 年の間に 3 倍の広大な大学に生まれ変わりました。その間、鉱害復旧が終了致しまして大学を取り巻く風景は非常に緑豊かになり、緑の環境が戻って参りました。そして初めて来学される方々から、綺麗な大学ですねという声をいただけるようになって大変に嬉しく思っております（図 3･4）。

まず、福岡県立大学の沿革について紹介致しますが（図 5）、先程もお話しましたように平成 4 年に人間社会学部が開学し、その後看護学部が平成 15 年に開設され、そして平成 18 年に公立大学法人福岡県立大学へ移行しました。特に、この平成 18 年度から本大学の発展は大変めまぐるしいものがあると教授として実感しております。

実は私ごとになりますが、平成 8 年に産業カウンセラーの資格を取得しました。その際、講座の中でキャリアカウンセリングというキーワードに出会いました。私は食育（小児栄養）が専門ですが、専門性を高める傍ら、これからの大学教育において、学生のキャリア形成をどのように支援していくかということが、大学教員として重要ではないかと考えるようになりました。そして、その手始めとして学生相談室の相談員を希望し、キャリアカウンセリングの視点から学生に対応してきました。

平成 18 年度、名和田理事長・学長の熱い思いのもと、キャリアサポートセンターが開設されました。そこに外部の産業カウンセラーが配置され、平成 18 年度を機に私の念願でしたキャリア形成支援が全学的に開始されました。その時の開所式の写真が出てきましたのでご紹介致します（図 6）。このようにグループで集まってキャリア形成講座がスタートしました（図 7）。小グループでの研修も開催されました（図 8･9）。今日、写真の中のこの方も会場に来られているのではないかなと思います。キャリアサポートセンターを中心としたキャリア形成支援活動が、平成 18 年から本格的にスタートしたと考えております。

一方、平成 4 年度から、入学当初に、学生たちのための合宿フォーラムを毎年実施してきましたが、その合宿フォーラムの中でも、キャリア形成支援を導入することになり、平成 19 年度から合宿フォーラムのプログラムにキャリア形成支援講座が位置づきました（図 10）。入学時に実施する合宿フォーラムへの参加は、自由参加としていますが、この数年間、学生の参加率は 100%となっています。1 泊 2 日の合宿フォーラムでは、長年 2・3 年生で構成しているフォー

ラム委員が、中心となって企画運営されてきましたが、その中に私たち教員がキャリア支援講座を少し入れさせていただくということで、合宿フォーラムがキャリア形成支援のキックオフの場として生まれ変わりました。

このスライドは、19 年度の導入時に、約 20 名の教職員がグループのファシリテータをしてキャリア形成支援講座を行った時の様子です（図 11･12)。今、会場におられます人間社会学部・学部長の森山先生にもファシリテータをお願いしました。各先生方が事前にファシリテータの練習をして、担当するグループの学生との初めての出会いをどのようにファシリテートを行うかということで、キャリア形成支援講座が本当に教員と職員と一体となって始まったということを実感させられました。

また、平成 19 年度には進路成熟度調査を、学生の実態をもっと把握する必要があるのではないかということで始めました。その時に得られた自己実現的態度の結果を示したものです（図 13)。ブルーのカラーが 1 年生のデータですが、入学当初、「人間的に成長したい（約 80%)」「生きがいのある生活を送りたい（約 80%)」「本当に満足できる仕事につきたい（約 70%)」「自分の力で自立した生き方をしたい（約 60%)」「世の中や社会のために役立つ人間になりたいと思う（約 60%)」という回答が 1 年生では非常に高く、そういう崇高な思いで入学している学生たちが多いことに私は大変感動し、胸を打たれました。この学生たちが本当に 4 年間、この福岡県立大学に来て「本当に良かった」「得をした」と、そういう実感が持てるような大学に是非したいという強い思いになりました。平成 20 年に森山先生がリーダーでされた「田川元気再生プロジェクト」の中で、大学生ボランティア活動に関する実態調査を行うことが出来ました。福祉学科の本郷准教授と松岡助手のお二人が中心となってきめ細かい調査項目を作っていただき、学生の素晴らしい結果を得ることが出来ました。本学生はボランティア活動に対する意識が非常に高いことが分かりました。本学の約 70%の学生たちがボランティア活動の経験があるという、これはおそらく日本一だと思って自負しております（図 14)。ボランティアに関わっている学生たちが大変多く、地域の方々と活動を通して接し、関わりが深くなっているということに気づかされました。今日、お見えになっている会場の方々も、学生たちのボランティア活動の発表があるということもお聞きになって、いらっして下さったのではないかなと思っております。そしてそれまで活動をしたことがない学生も、ボランティア活動に参加したいという意欲が非常に高いということも明らかになりました。

一方、本学にはボランティアサークルがたくさんありますが、「自分たちの活動の拠点となる場が大学の中にない」「自分たちのスキルでは十分に対象の方に関われない」という訴えも多く聞かれました。そういう中で私たち大学は学生のために何ができるか、拠点となる場をどう提供できるか、等などと検討していく中、2009 年 12 月 14 日、理事長・学長のご尽力により、福岡県立大学の中に、しかも附属研究所の中に、社会貢献・ボランティア支援センターを設置していただきました（図 15)。ちょうど、センターが設置され 1 年になりますが、一昨年前、このステージで開所式をさせていただきました。

社会貢献・ボランティア支援センターが設置されて、毎月ボランティアサークルの学生たちと月例の懇談会をしながら、学生のニーズを色々聴くという教員と学生との交わりが継続しています。本年 2010 年度に、社会貢献・ボランティア支援センターを訪れた学生が延べ 850 人を超しました。我が大学の学生総数は 1100 名です。訪れた学生が 850 名を超すということは、それだけ学生にとって魅力のある場所になったのではないかなと思います。そこには専門研究員として位置づいている原口さんの、非常に温かい学生との関わりもあるのではないかと思っています。

さて、就業力向上を目指す社会貢献支援プログラムとはどのようなプログラムか紹介させていただきたいと思います（図 16)。

その前に就業力と聞いても初耳の方、あまり聞き慣れない言葉、就活とかという言葉はご存知でも、就業力という言葉は初めての方もおられるのではないかなと思います。この言葉について先にご説明させていただきます。就業力を本学では、「幅広い職業人としての職業開拓力及び社会的強み、社会貢献力を兼ね備えている力」（図 17）と捉えました。この社会的強みは

学生が何十年という長い歴史の中で、大学の前身として短大が開学していましたが、短大時代を入れて 40 年以上継続しているボランティアサークルが実際大学内に存在しています。そういう本学の学生達の歴史を踏まえ、わが大学の特徴であるボランティア活動を活かした力をどう育てていくかという意味で、社会貢献力を兼ね備えている力と捉えました。

本学は、就業力の育成はすでに法人化後始まっています。そこで、さらなる向上を目指すということで、「就業力の向上」ということに力点を置くこととしました。単に育成ではなく「就業力の向上」です。「目的意識を持って幅広い職業人になるための学修を継続・深化させ、大学卒業後に役立つ、社会貢献出来る実践的能力を獲得すること」を定義としました(図 18)。今回、文部科学省は定義については各大学で決めてかまいませんということでございましたので、福岡県立大学ではこのような定義としました。

本学生たちを対象に、進路及び社会性に関する調査を 21 年度から実施してきました。今回 22 年度の 1 年生全員を対象に行った調査データをもとに、就業力を構成する力として、進路および社会性に関する調査データの中から 8 つの力を抽出することが出来ました（図 19)。「職業観・勤労観力」「計画的学修推進力」「キャリアデザイン力」「ストレス耐性力」「コミュニケーション力」「自己理解力」「統合的学修力」「創造的思考力」という 8 つの力を抽出することが出来ました。これらの 8 つの力をレーダーチャートで示しますと、このようなチャートを描くことが出来ました。この赤のラインが、22 年度に入学してきた学生たちのそれぞれの力の達成率の平均値です（図 20)。各力の達成率の数値を紹介しますと、このような結果となりました。キャリアデザイン力は 68.1%、計画的学修推進力は 79.9%、職業観・勤労観力は 84.4%の達成率でした。一方、ストレス耐性力は 61.7%、コミュニケーション力は 54.6%、自己理解力は 54.5%、統合的学修力は 49.3%、創造的思考力は 43.6%と、これらの力がこちらに比べて劣っていることが明らかとなりました（図 21)。

本学の就業力の課題として「コミュニケーション力」、「自己理解力」、「ストレス耐性力」、「創造的思考力」、「統合的学修力」の 5 つの力が、本学生の弱み、課題として捉えることが出来ました（図 22)。

ボランティア活動が先程から大変活発に行われてきたというお話をしましたが、学生のボランティア活動の経験や意欲が、どうやら就業力向上に直結していないのではと推察しました（図 23)。

社会貢献・ボランティア支援センターが設立され、そのセンターのセンター長を拝命してから学生とボランティア活動について色々と懇談する時間が持てるようになった中で、学生が入学してすぐにボランティア活動のために地域に出かけ、そこで色んなことを地域の方から教えてもらっていることに大変感動させられました。そして、実はその活動は、彼ら一人一人の就業力に繋がっていることに気づきました。ところが、学生たちはそれが就業力に繋がっているという実感を持っていない。私たち大学側は、学生がボランティア活動に一生懸命取組んでいることが、就業力の向上に繋がっているということを学生にも気づいてもらいたいと思うようになりました。

就業力の本学の弱みである「コミュニケーション力」「自己理解力」「ストレス耐性力」「創造的思考力」「統合的学修力」を高めていくことが就業力向上に繋がると確信しています（図 24)。

今後の取組としては（図 25)、実学的専門科目の開講と充実を図ります。従来、本学は一般教育科目や各学科特有の専門科目を開講してきました。それだけではなく人間としてどうあるべきかとか、外の社会、産業の社会がどのようになっているかとか、それらについて早期に学んでいく場が必要ではないかと考え、実学的専門科目の中に社会貢献論とか、社会貢献論演習とか、両学部で学ぶと専門科目や海外語学実習演習・海外語学実習などを取りいれ、実学的専門科目の開講と充実を図っていきます。それから社会貢献・ボランティア支援センターとキャリアサポートセンターの連携強化。社会貢献・ボランティア支援センターは開設してまだ 1 年足らずですが、両センターが連携を強化していくことが、学生のためになるのではないかと考えています。それから、キャリア支援講座の充実。系統的にキャリアをどう積み重ねていくか、

一人一人が持っているキャリアの弱みというのはそれぞれ違っています。個別にその人の特性に合わせたキャリア支援講座の開講も企画していきたいと考えています。それから従来から 3 年生が中心にインターンシップに参加していますが、それをもう少し先取りして 1 年生からインタンーンシップに出る機会を作る。すなわち、プレ・インターンシップと呼ばせていただきますが、そのプレ・インターンシップ先を開拓する。是非、今日会場に来られている地域の方々、また是非プレ・インターンシップの場として提供しても良いと思ってらっしゃる方、是非お声かけをいただけると大変ありがたく思います。そしてそのプレ・インターンシップの経験を全学学生ができるようなしくみ作りを考え・実行していきたいと思っています。

学生の自立をどう支援していくかという意味で、学生たちの多くがボランティア活動や社会貢献活動を行っていますが、そのことを学生自身が自覚・自己管理出来るようになるために、社会貢献活動記録帳として「マイキャリポケット」を今準備中です。マイキャリポケットを 1 年次に学生たちに渡し、就業力の自己管理の実施を支援していきたい。

そして学びの成果を共有し自己を確認し、次の取り組みの計画を立てるため各学年末に全学的な社会貢献フォーラムを開催し、4 年次には学びの集大成として、公開卒論発表会を行う予定です。今日のこの会が、社会貢献フォーラムⅠの場に相当しています。

実はこの社会貢献フォーラムでは特別講演・基調講演を安藤先生それから関戸先生にお願いしていますが、その後学生のパネルディスカッションを予定していますが、学生たちはこれまでの活動の成果、この 1 年間の取組をまとめるために、徹夜をして頑張ってきました。1・2 年生たちにこれほどパワーがあることに私は感動しました。毎日朝の 5 時までかかって今日のために準備してきました。小松は食育の専門家ですので、小松先生お腹がすいたご飯作って下さいと言われ、生きる上での糧を提供しながら学生を応援してきました。今日、最後までぜひ学生の発表を応援していただきたいと思います。

卒業生に対するリカレント教育の実施については、これらの取組を今後きめ細やかにやっていく予定です。その取組を経時的に示したのがこの図です（図 26)。1 年次、2 年次、3 年次、4 年次というふうに社会貢献・ボランティア活動を支援し、キャリア形成支援・個別支援、この 2 つの軸を育てながら、その成果を社会貢献フォーラムⅠ・フォーラムⅡ・フォーラムⅢで発表しながら、最終的には公開卒論発表会段階までいくと、かなりの「就業力」が身につくのではないかなと考えています。正課教育と正課外教育を一緒に実施していきたいと思っています。

今回の取組を上手く機能させていくために、就業力向上支援会議と就業力向上支援プログラム推進会議が全面的にバックアップしながら、全学的に両学部で取り組んでいきます。

達成目標としては（図 27)、ただ今ご紹介しましたプログラムを実施していくことによって、例えば実学的専門教育科目や社会貢献活動の体験を通して、「創造的思考力」「自己理解力」「コミュニケーション力」「ストレス耐性力」が強化されていきます。それから、系統的なキャリア形成支援講座や、プレ・インターンシップを通して「職業観・勤労観力」「キャリアデザイン力」を向上させるとともに「自己理解力」「統合的学修力」「ストレス耐性力」の強化を図ります。社会貢献フォーラムや公開卒論発表会を通して「計画的学修力」を更に向上させるとともに「コミュニケーション力」「創造的思考力」「統合的学修力」の強化を図っていきます。卒業生に対するリカレント教育を通じて、身に付けた就業力の更なる向上を目指していきたいと考えています。

先程もお見せしましたが、こちらの比較的高い数値の力の達成力を更に高め、そしてこちらの弱い力を強化していくプログラムを企画・実施しています。

学生には個別に、8 つの力のレーダーチャートを随時返していきます。学生が色んな講座に参加したり活動に参加するたびにこの達成率が、どのように変化していくかということをタイムリーに学生に返したいと考えています。そこには外部カウンセラーの関わりが大変重要になります。全体として平均 85%を到達目標にして頑張っていきたいと考えています。

本プログラムはまだスタートしたばかりです

(図 28)。プログラムが実際に動き出したのは 1 月からですので、まだ 2 ヶ月間の稼働ですが、就業力育成のための学びと実践活動を効果的に取り入れながら、本学生の更なる就業力向上を目指したいと思っておりますので、是非地域の皆様方の応援をよろしくお願いしたいと思います。

県立大学に在籍している学生たちの素晴らしさを、今日おそらく学生の発表とパネルディスカッションを通して気づいていただけるのではと思っています。

本年度、社会貢献論と社会貢献論演習を連続して受講した学生も参加します。その学生は、今回の本プログラムを活用しながら学びを深めています。社会貢献論演習から得られた調査研究データを 1 年生の阿部さんが発表することになっています。それから、各サークルでボランティア活動をどのように行ってきたかということと活動から見えてきた課題について、各ボランティアサークルの学生が丁寧に発表します。また、実際に社会貢献活動を熱心に取組んできた 4 年生の上野さんの発表にも是非ご注目していただきたいと思っています。

ご清聴どうもありがとうございました。以上でございます。

事業紹介と今後の取り組み

平成23年3月3日
社会貢献フォーラムⅠ

就業力向上事業リーダー
（就業力向支援プログラム推進会議委員長）
小松　啓子

1

文部科学省は、学生の就業率が厳しい中で、学生の資質能力の向上に対する社会からの要請や地域社会の変化を踏まえた就業への要請に応えるため、教育課程の内外を通じた社会的・職業自立に向けた指導を制度化し、平成22年に「大学生の就業力育成支援事業」を公募しました。

4年間にわたり準備してきました本学の「就業力向上を目指す社会貢献支援プログラム」が選定されました。

2

3

4

福岡県立大学の沿革

2010年学生便覧

1945（昭和20）年 福岡県立保健婦学校設置
1952（昭和27）年 福岡県立保育専門学院設置
1952（昭和27）年 福岡県立保健婦学校を福岡県立保健婦養成所に再編
1954（昭和29）年 福岡県立保育専門学院を福岡県立保母養成所と改称
1962（昭和37）年 福岡県立保健婦養成所を福岡県立公衆衛生看護学校と改称
1967（昭和42）年 福岡県立保母養成所を発展的に改称し、福岡県社会保育短期大学を開学
1971（昭和46）年 福岡県立公衆衛生看護学校を福岡県立看護専門学校に再編
1992（平成 4）年 福岡県立大学（人間社会学部）開学
1993（平成 5）年 福岡県社会保育短期大学閉学
1997（平成 9）年 福岡県立大学大学院人間社会学研究科（修士課程）開設
1998（平成10）年 福岡県立大学生涯福祉研究センター開設
2003（平成15）年 福岡県立看護専門学校閉校し、看護学部開設
2006（平成18）年 公立大学法人福岡県立大学へ移行
福岡県立大学附属研究所設置、ヘルスプロモーション実践研究センター設置
韓国大邱韓医大学校との学術交流に関する協定の締結
2007（平成19）年 福岡県立大学大学院看護学研究科（修士課程）開設
2007（平成19）年 不登校・ひきこもりサポートセンター設置
2008（平成20）年 福岡県立大学看護実践教育センター設置
2009（平成21）年 人間社会学部「社会学科」を「公共社会学科」へ名称変更
タイ国コンケン大学との国際的な学術協力に関する覚書の締結
北京中医薬大学との学術・教育・文化に関する協定の締結

産業カウンセラー取得
学生相談室の相談員

キャリアサポートセンター開設

キャリア・コンサルタント配置
キャリア形成支援開始

5

6

7

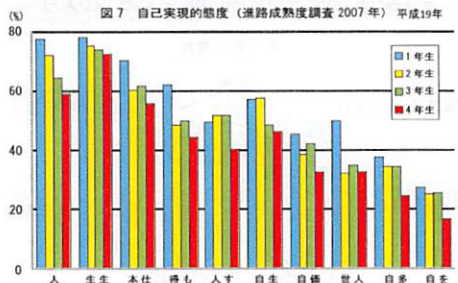
8

キャリアサポートセンターを中心としたキャリア活動支援
入学時からの一貫した職業キャリア意識の形成と獲得取組を実施している。
キャリアサポートセンターを中心としたキャリア活動支援、インターンシップ取組支援活動は、
学生生活の全般を支援する学務部学生支援班と連携して、キャリア形成への支援活動
を専門に担う部門として、産業カウンセラーを配置して平成18年度に開設した。
キャリア講座の運営、キャリア相談・指導をきめ細やかに行っている。
学生のキャリア形成・進路選択に関する調査を毎年実施し、職業意識や
自己理解像の把握を行って、キャリア活動支援に反映させている。
9

入学時に実施される合宿フォーラムからスタートするキャリア形成支援
10

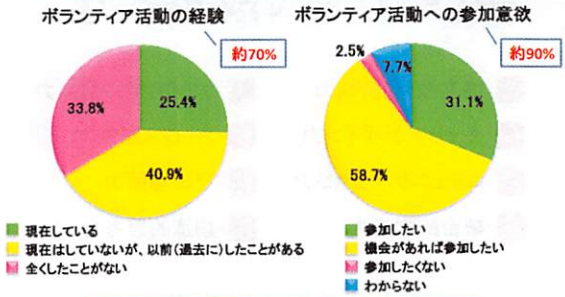
入学時に実施される合宿フォーラムからスタートするキャリア形成支援
合宿フォーラム参加による仲間づくりと学びの指針獲得を行っている。
合宿フォーラムは、平成4年の大学開設以来15年間継続実施している（学生参加率93%）。
入学式の翌々日から一泊二日、300人（新入生250人、先輩学生20人、教職員30人）で実施している。
実施に関わる支援活動の主力は、2･3年次の先輩学生達である。
プログラムの狙いは、友人づくり、学びの指針獲得、キャリア・職業について考える、で構成している。
参加学生の93%が、合宿フォーラムの継続性を高く評価している。
11

合宿フォーラムの充実
新入生合宿フォーラムでの「キャリアサポート講座」
教職員によるファシリテーター
12



13

県大生の特徴（ボランティア意識）



ボランティア経験者が多く、ボランティア活動への意欲も高い！

田川元気再生プロジェクト「大学生ボランティア活動に関する実態調査」（平成20年11月実施全学生対象）

14

福岡県立大学の沿革

2010年学生便覧

1945（昭和20）年　福岡県立保健婦学校設置
1952（昭和27）年　福岡県立保育専門学院設置
1952（昭和27）年　福岡県立保健婦学校を福岡県立保健婦養成所に再編
1954（昭和29）年　福岡県立保育専門学院を福岡県立保母養成所と改称
1962（昭和37）年　福岡県立保健婦養成所を福岡県立公衆衛生看護学校と改称
1967（昭和42）年　福岡県立保母養成所を発展的に改称し、福岡県社会保育短期大学を開学
1971（昭和46）年　福岡県立公衆衛生看護学校を福岡県立看護専門学校に再編
1992（平成 4）年　福岡県立大学（人間社会学部）開学
1993（平成 5）年　福岡県社会保育短期大学閉学
1997（平成 9）年　福岡県立大学大学院人間社会学研究科（修士課程）開設
1998（平成10）年　福岡県立大学生涯福祉研究センター開設
2003（平成15）年　福岡県立看護専門学校閉校し、看護学部開設
2006（平成18）年　公立大学法人福岡県立大学へ移行
福岡県立大学附属研究所設置、ヘルスプロモーション実践研究センター設置
韓国大邱韓医大学校との学術交流に関する協定の締結
2007（平成19）年　福岡県立大学大学院看護学研究科（修士課程）開設
2007（平成19）年　不登校・ひきこもりサポートセンター設置
2008（平成20）年　福岡県立大学看護実践教育センター設置
2009（平成21）年　人間社会学部「社会学科」を「公共社会学科」へ名称変更
タイ国コンケン大学との国際的な学術協力に関する覚書の締結
北京中医薬大学との学術・教育・文化に関する協定の締結

2009年12月14日　福岡県立大附属研究所内に社会貢献・ボランティア支援センターを設置

産業カウンセラー取得
学生相談室の相談員

キャリアサポートセンター開設

キャリア・コンサルタント配置
キャリア形成支援開始

15

「就業力向上を目指す
社会貢献支援プログラム」

16

就業力

「幅広い職業人としての職業開拓力及び社会的強み（社会貢献力）を兼ね備えている力」と捉え

17

就業力の向上とは

目的意識を持って、幅広い職業人になるための学修を継続・深化し、大学卒業後に役立つ、社会貢献できる実践的能力を獲得すること

18

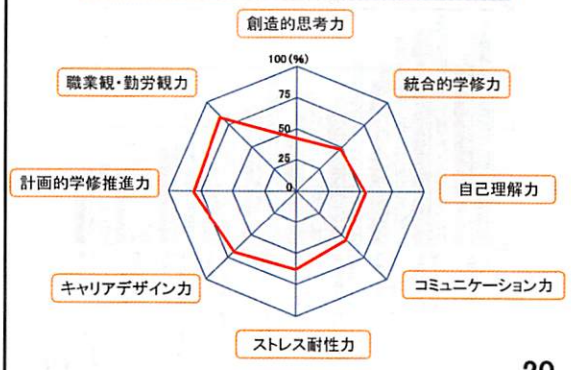
就業力を構成する力

- 職業観・勤労観力
- キャリアデザイン力
- コミュニケーション力
- 統合的学修力
- 計画的学修推進力
- ストレス耐性力
- 自己理解力
- 創造的思考力

進路および社会性に関する調査データ（平成22年度1年生）

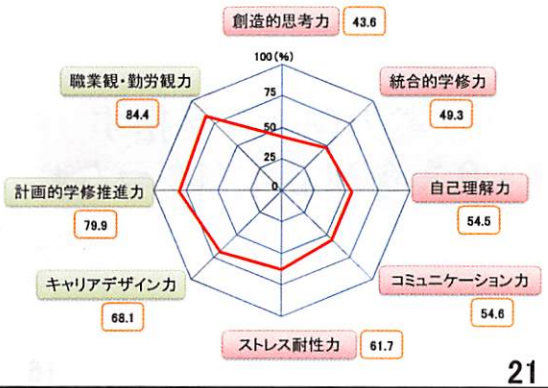
19

本学生の就業力を構成する8つの力



20

8つの力の達成率



21

本学の就業力の課題

- コミュニケーション力
- 自己理解力
- ストレス耐性力
- 創造的思考力
- 統合的学修力

22

ボランティア活動の経験や意欲

就業力向上に直結してない

23

5つの力の育成

- コミュニケーション力
- 自己理解力
- ストレス耐性力
- 創造的思考力
- 統合的学修力

就業力を向上

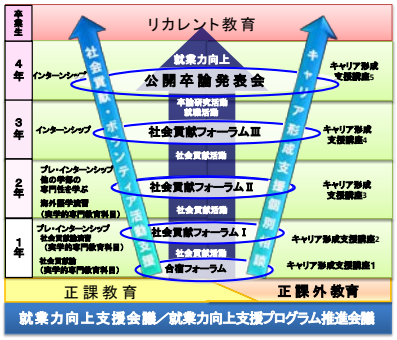
24

今後の取り組み

- 実学的専門科目の開講と充実
- 社会貢献・ボランティア支援センターとキャリアサポートの連携強化
- キャリア支援講座の充実
- プレ・インターンシップ先の開拓および全学生の活動支援
- マイキャリポケット（社会貢献活動記録帳）による就業力の自己管理の実施とプレ・インターンシップの単位化
- 学びの成果を共有し、自己を確認し、次の取り組みの計画を立てるため、各学年末に全学的な社会貢献フォーラムの開催、4年次には学びの集大成として公開卒論発表会を行う
- 卒業生に対して、リカレント教育の実施

25

就業力向上を目指す社会貢献支援プログラム



26

福岡県立大学
就業力向上を目指す社会貢献支援プログラム達成目標

1. 実学的専門教育科目（社会貢献論、社会貢献論演習、海外語学実習）や社会貢献活動の体験を通して
「創造的思考力」「コミュニケーション力」「ストレス耐性力」の強化
2. 系統的キャリア形成支援講座やプレ・インターンシップを通して
「職業観・勤労観力」「キャリアデザイン力」をさらに向上させるとともに**「自己理解力」「統合的学修力」**の強化
3. 社会貢献フォーラムや公開卒論発表会を通して
「計画的学修力」をさらに向上させるとともに、
「コミュニケーション力」の強化
4. 卒業生に対するリカレント教育を通じて
身につけた就業力のさらなるの向上

27

本プログラムはスタートしたばかりです。
就業力育成のための学びと実践活動を効果的に取り入れながら本学学生の、さらなる就業力向上を目指したい！

28

特 別 講 演

「働くこと、生きること、私の体験から」

（社）日本産業カウンセラー協会会長
安藤 一重 氏

ご紹介ありがとうございました。ただいまご紹介いただきました、社団法人日本産業カウンセラー協会の会長を務めております安藤と申します。名前だけ見ますと、多分男性かなと思われてる方も多いのではないかと思いますけれども、そうゆうところで名前を知っていただけるかなという風に思います。本日は本当に遠い中、そして皆様方お足元の悪い中、このように沢山の方が大学のこのフォーラムのためにお集まりいただき、大変感激をしております。私は今ご紹介をいただきましたけれども、実は隣町の豊津の出身でございまして、豊津高校を卒業して東京の方に出て行ったということで、大変この伊田と言う土地は私にとっても懐かしい所でございます。子どもの頃には叔母が伊田にいまして、川渡りのお祭りに来た思い出もございます。今日は小倉から日田彦山線という電車に私は初めて乗り、沿線の風景を楽しみながらやって参りました。いつもは行橋から今の平成鉄道で伊田に来ていたものですから、あの電車に初めて乗り、本日お集まりの皆さんとここでお目にかかりますことを大変楽しみにして参りました。

早速ですが、只今、小松教授の方からお話がありましたが、小松教授は平成 8 年に産業カウンセラーの資格を取られたというようなご紹介がありましたので、産業カウンセラーのことを少しご紹介をさせていただきたいと思います。皆さんのお手元に事業案内というのが入っているかと思いますので、ご覧いただきたいと思います。

私たちの社団法人日本産業カウンセラー協会は、昭和 60 年、1960 年に設立をされた団体でございます。当時を皆さん振り返っていただきますと、1960 年と申しますと、経済が大きく成長し、そして日本中が経済発展していく中で沢山の労働者が工業地帯に集まって来た、そういう時期でございます。その当時、そういう労働者の働き手として、多くの中学卒の少年少女たちが「金の卵」ともてはやされて日本のあちこちの工業地帯に集団列車で送られてきたのです。この青年たちを何とか職場に定着させ、そして生活の安定のために応援をしようということで立ち上がったのが、私たち協会の先輩たちでございます。こういう方たちが、それぞれ、寮の舎監さん、あるいは企業の人事部・厚生部・教育部、そして心理学者、精神科のお医者さんたちが集まって出来たのが、私どもの協会でございまして、昨年 50 周年を 11 月 23 日に迎えた団体でございます。なかなか皆様のお耳に届くことなかったのではないかと思いますが、当時の労働省から認可された公益法人でございます。そして、今私たちの協会は 4 万人を超える産業カウンセラーを排出しておりまして、年齢も高くお亡くなりになった方もいらっしゃいますけれども、現在は 2 万 3 千人の会員が沖縄から北海道までの全国で 13 の支部に所属をして活動を展開しております。

今、小松教授からお話がございましたように、昨今の若者たちのキャリア形成をどのようにしていくのか、あるいは企業で働いていらっしゃる方々のキャリア開発、そして今社会的にも非常に問題となっておりますメンタルヘルスをどのように展開をしていくのかと、このような分野で私どもの協会は活動を展開しているわけでございます。

九州にも 2 千名近い会員たちがそれぞれのと

ころで活躍をしておりまして、来年4月からは、お目にとまったことがございますでしょうか。厚生労働省のホームページに「こころの耳」といバーナーがございます。そのウェブサイトの運営をさせていただくことになっています。これはウェブ上でメンタルヘルスのさまざまな知識や、それからうつ病や自殺をどのように予防していくのか等の情報がたくさん掲載されています。実際に企業の方々はこれを見てどういうようなことを注意しながら皆さんへの援助をしていくのかというようなことを、気軽に見ていただけるようなそういうシステムになっております。こういうようなことを厚生労働省から依頼を受けて、実施をすることになっております。

そして多くの会員の皆さんは、それぞれのお立場で今日の小松教授のように大学の中で、あるいはハローワーク等の就職相談、あるいは看護師さんとして、あるいは管理職として、というようなところで、ご援助を申し上げておりますし、カウンセラーとして独立をして実際に仕事をしている方々だとか、そういう方もたくさんおられる、そういう団体でございます。

かつては、女性が非常に多い団体で、会員も女性のほうが多かったわけですけれども、最近では男性方もこの勉強をされるなど、努力をされる方が多くなり、社会のために役立ちたいということで頑張っております。そういう意味では、小松教授がさっき言われましたように、私たちの団体そのものもボランティアを中心にして展開をしている、そんな団体でございます。ですから設立をされた時に、この「金の卵」の少年少女たちを援助しようということで先輩たちはボランティアで活躍をしていた、そういう人たちの崇高な精神を受け継いで、今も頑張っている人がたくさんいらっしゃる、そんな団体でございます。

そして主な事業案内としては、そこにも書かしていただいておりますように、産業カウンセラーの養成をやっております。丁度今、各地で養成講座の受講生を募集しているところでございまして、この九州でも各県、そして北九州では小倉とそれから福岡、がこの地域では開講をしているというような状況でございます。加えて産業カウンセラーという試験を実施をしております。産業カウンセラーという資格試験、そしてシニア産業カウンセラー、キャリアコンサルタントという3つの資格試験を実施している団体でございます。

この資格は平成3年から13年までの10年間は厚労省が認める公的な資格として、産業カウンセラーの称号を与えていたわけでございますが、丁度この時期に小泉内閣が誕生しまして、公益法人に対する見直しがすすみ、特に規制緩和と行政改革の中で公的な資格ではなくなりましたけれども、現在でもその当時と同じような、むしろカリキュラムを充実をして試験を実施しているというそのような団体でございます。ぜひ産業カウンセラーを色んな所でご活用いただくとともに、皆さんの周りで産業カウンセラーの活動等についてもぜひご理解いただき、おすすめいただくことが出来れば幸いだという風に思っております。

では、大変失礼しました。事業案内はそれくらいにして、それでは次に入っていきたいという風に思っております。

私の表題はそこに書かせていただいておりますが、生きること、働くことを考える、私の体験からという、大変おこがましい表題をつけさせていただきました。

私は隣の町の豊津高校を卒業しまして、東京に出ていったのですが、大学を卒業致しまして、先程ご紹介ありましたように東京労働金庫という労働者のための銀行に入庫致しました。

私が労働金庫に入りました当時は、丁度炭鉱の三井三池の閉山などのための争議があり、労働金庫は労働者のための銀行ですから、そういう人々に対する支援のために、お金を融資したり、積立金をしていざというときのための資金にするなどの取り組みもしていました。また、私の職場にも三井三池の炭鉱を辞職した方が守衛さんとうとして入っていらっしゃるというような職場でございました。そういう職場の中で、私自身はずっと働くことが出来たというのは何だろうという風に考えてみますと、職場での周りの人たちとの人間関係に恵まれていたなあという風に思っています。そして、今もこのように働く方々の支援ができる仕事ができることに、私自身大変感謝しながらの毎日を送っているわけでございます。私自身のキャリアを通しながら日本

の社会の変化と、そして働くことと生きることをどのように私が感じてきたかというようなことを、少しお話出来たらという風に考えております。

今、私たちの社会は大変大きな変化の中にあります。そして国民にとって、中でも働く人を巡る状況も大きな変貌を遂げているというのは、ご承知の通りでございます。特に労働環境の中で、産業の構造と就業構造の変化というのは大変めまぐるしいものがございます。私が働き始めた 1960 年の頃というのは、農林、それから農業、そして漁業に従事していた方というのは 40%いたわけですね。今はもうそれが 3.8%になっているわけです。ですから、食糧の需給の問題というのが今大変大きな課題になっていますけれども、就業構造そのものが大変大きく変わってきているということは、もうご承知の通りではないかという風に思います。

私の父も、実はフィリピンに行っておりまして私自身も海の向こうのフィリピンで産まれた人間ですけれども、日本にかえってきた当時、私の子供の時代というのは町を見てみても、それぞれの職人さんが、大工さんだとか左官さんだとか、あるいは魚屋さんだとかあるいは乾物屋さん下駄屋さんだとかですね、それぞれそういう職業、家業に就かれている方が非常に多くて、サラリーマンではなかったわけですね。私の父もサラリーマンではございませんでした。そういうようなところから考えますと、現在ではサラリーマンになられている方の率っていうのは、ほとんど 90%近くになっています。

統計を調べて参りました。1949 年にはサラリーマンが 34%、そして 1956 年では農林漁業が 40.4%、サービス業が 10.7%でした。ところが 1970 年になりますと、サラリーマンは 65%、農林漁業が 16.4%ですから、先程申し上げましたように高度成長の中で、漁業、あるいは農業、林業を離れて都会に出稼ぎに来る方も非常に多くなる一方で地方出身者の大学卒業者もサラリーマンになっていきました。そして日本が高度に成長した時代ですから、製造業が 27.2%と大きな伸びを示し、日本の社会が大きな発展を遂げ、重化学工業を中心にしてサラリーマンが急に増加をしたのが 1960 年から 71 年です。そしてこの時代ではサービス業は 14.7%だったわけですが、現在ではどのように変わっているかと申し上げますと、2007 年には農業、魚業が 3.8%、製造業が 17.6%、サービス業が 30%というように大変大きな就業構造の変化をもたらしております。そして、二つ目には産業経済が非常にグローバル化にしてきまして、ＩＴ化で企業の再編・統合が進んでまいりました。

他方、海外への移転などによって、企業が生き残りをかけてさまざまな政策、制度を実行してきているわけです。

このような中で、私たちの労働時間、あるいは雇用形態が随分変化をしてまいりました。皆さんもご存じのように、この雇用形態の変化と申しますと、フレックス制は導入されて相当時間がたっていますが、柔軟な労働時間に変わってきたり、サービス業が増加しまので、その特徴は交代制で仕事をする、あるいは SOHO（スモールオフイス・ホームオフイス）という自宅が事務所でコンピューター中心の仕事をするという方法も出てきています。このような働き方が増加してきますと、同じ時間帯で仕事をしないため人間関係が非常に希薄になってきます。また、現在は非正規の人が職場に多くなっていますので、派遣やパート、嘱託などの人が混在して仕事をしていますので、正規の人の残業時間が増え健康問題にも大きな影響を及ぼすというような状況が表れてまいりました。

私は、1975 年くらいから社員の健康の問題に取り組んでまいりました。その当時はどういうことが起きていたかと申しますと、皆さんの記憶にも新しいかと思いますけれども、合理化、機械化によって頸肩腕症候群という、そういう病気が非常に増えてまいりました。これは特に金融や証券、そういう職場で増えてまいりまして、肩が凝り、あるいは首が凝り、腕が痛くて子供を抱っこ出来ないというような、そういう人たちが私たちの職場でも沢山出てまいりました。こういう人たちの援助をどのようにしていくのかとういうことで、私が健康の問題に関心を寄せるそういうきっかけになったわけでございます。

また、心の問題では当時はうつ病というよりも、精神疾患の方というのはいらっしゃいましたけれども、ほとんどが統合失調症の方たちでございました。現在ではどうでしょうか。現在

では、うつ病の方が大多数を占めております。このうつ病の方々のその原因が、職場の人間関係がほとんど40%以上占めているというような職場の環境が今起きてきています。

私たち、産業カウンセラー協会は毎年9月10日の世界自殺予防デーを中心に、メンタルヘルス、「働く人々のホットライン」と銘打って、無料の電話相談を全国で実施をしております。

この電話相談の中で、寄せられている皆さんの声というのはもう凄まじいものがございまして、職場の中でのいじめ、あるいはパワハラ、そしてグループでの仕事をしていく中でなかなかうまく皆さんとの人間関係がとれないことによる悩み、それから非正規社員の方々からは働くことが出来なくなる、あるいは雇い止めになって寮を出なければいけなくなる、明日からどこで生活をしたら良いのだろうというような、非常に深刻で痛ましい悩みをお聞きしています。

こういうことに対して私たちはそれぞれのいろいろなネットワークを使ってご紹介をしたり、あるいはその人の悩みを真摯に受け止め、その人の気持ちに寄り添い、必要な情報提供や助言をさせていただいています。このような取り組みを5年前からやっていますが、昨年の9月の電話相談で非常に特徴的だったのは、無縁社会ということが大変多くのところで言われ始めている頃でテレビでも放映がされたりしましたけれども、本当に孤独な老人たちの相談も多くなっているというのが特徴だったように思います。そういう意味から申し上げますと、本当に私たちが今、暮らしている社会っていうのはかつて私が働いていた時代と比べますと、大変な様変わりになっているということが言えるのではないかなと思います。

非正規のところで働いている方々が、この1月の新聞報道によりますと、34%に至っていると報道されていますが、過去最高で正規雇用は25万人昨年よりも減少しているということですから非正規労働者が増加するのは当然ですね。特にリーマンショック後に非正規労働者切りが相次ぎ、その時失業した人たちの多くが1年後もなお就業出来ていないというような状況が続いているというのが現在の状況です。

そしてここでは学生の皆さんも沢山いらっしゃいますけれども、学生さんの内定率は今68%ということが新聞で報道をされています。そういう中で各大学も大変様々な取り組みをされていて、留年をされた学生さんたちに授業料の減額、あるいは、そういう就業のための面接指導なんかをかなり実施をされていらっしゃるというようなことがニュースとしてとりあげられていました。　　そういう実態を考えますと、この福岡県立大学では就業力アップのためのさまざまなプログラムが組まれ、そしてボランティアによる皆さんの生活体験が組まれているということをお聞きして、私は大変心強く思った次第でございます。

私たちが本当に働くこと生きることをどう若者たちに引き継いでいくのか、あるいはそのことを通して、次の世代に担っていただく若者を育てていくのかということが今ほど問われている時はないのではないかなという風に考えております。

そういう意味で言いますと、今、サービス業が30%を超えています。このサービス業の人たちというのはどういう状況かと申しますと、今、コンビニやあるいはスーパーとかに象徴されておりますように、東京では24時間開いているコンビニなども沢山ございます。そういう働き方ではほとんどの皆さんが同じ時間帯に仕事をするのではなくて、別々なところで別々に仕事をする、また、管理職も不在などということになっていますので、なかなか人間関係が作れないというのが一つの特徴ではないか思います。

ですから、そういう意味で申し上げますと、私たちの産業カウンセラー協会もそうですけれども、この若者たちを本当に生活力溢れる、そしてどんなことがあってもくじけない、問題解決がすすんで出来る、そういう若者をどう育てていくというのが今一番問われているのではないかなと思います。

私どもが実際に色んな統計などを取らせていただいておりますけれども、今の若者たちの特に大学を卒業し、企業が採用選考に時に何が一番必要かということを申し上げますと、先程小松教授の話の中にもございましたように、コミュニケーション力が76.6%で1位、すなわち人間関係を構築する能力です。そして2位は56.1%で協調性、3位は55.2%で主体性、4位は51.5%でチャレンジ精神、5位が40.0%で誠実性、次

が 36.6%で責任感と 2008 年度の調査ですが出ています。この数字を見てもかなりの率で他に比べてもコミュニケーション能力が大きく問われているのがご理解いただけるのではないでしょうか。

皆さんの記憶に新しいものとしてチリの落盤事故がございます。あの時に地底に閉じ込められていた皆さんが全員生還されたニュースは世界中を駆け巡り世界中の人々に大きな感動を呼びました。あのように全員が助け合って生存が出来たというのは、何だろうかなあということを考えてみますと、あの極限のなかで生存していくための能力は何だったのでしょうか。例えば落盤の地層がどのようになっているのか、限られた食糧をどのように分配し、命をつないだのか、それぞれが持っている能力をそれぞれが分担しあうことが問われたといわれます。それは仕事を分担し担当する能力、あるいは問題を解決する能力、関係者間を調整する能力、逆境や転機の際の自己復元能力などといわれています。このような能力が当てはまっていたからこそ、チリの落盤事故にあわれた 33 人の方々が生還されたのです。そのことは別の言い方をしますと問題を解決する力、あるいは課題を達成するためにどのように力を合わせていくかの能力といえるでしょう。

そういうようなことを考えますと、今、産業経済省が掲げていますのが、「社会人力」すなわち人間力ですが、一番必要とされているのが何かと申し上げますと、問題を解決する能力をどう育てていくのか、そして課題の発見をどのようにしていくのか、そしてそれを解決するためにどのように知恵を絞っていくのか、というようなことが問われていると私は思います。

今、この福岡県立大学の中でそのような活動が展開されようとしていることに、私は心から敬意を表したいと思っています。実際に、私たちが職場の中で働く時に何が必要かと申しますと、本当に今ほどコミュニケーション能力が不足しているときはありませんので、この能力がいちばん求められています。そしてお互いがお互いを大切にする、困った時にはSOSを出せる、すなわち自分の事を伝えることができる能力、そして逆境に耐える能力が必要になります。

私たち産業カウンセラー協会は草創期から、このコミュニケーション能力をどのようにつけていただくのか、人間関係を円滑にしていくのかということを大切にしています。そこで産業カウンセラーの養成講座では、徹底的にコミュニケーション能力をつけるための練習というのでしょうか、実技演習をさせていただいております。

この講座を実際に受講された多くの企業人の皆さんからは、今までいかに人の話を聞いていなかったのか、そして、自分自身がどのようにこれから生きていくのかということを学んだ、ということを言っていただいております。そういう意味で、今職場の中で必要とされていることを、私たちはさらに努力をしていきたいと思っているところでございます。

実際にどのようなことがこれから必要になってくるのかと申し上げますと、キャリア開発をどのように職場の中でしていくのか、あるいは自分自身で必要とされるようになったのかということを考えてみますと、かつて私の若い頃はそうですけれども、ほとんどが職場に入ると日本的な経営の特徴として、会社に入るのは就職ではなく就社、ほとんどの方が入った会社で定年まで働き、そして企業で教育も全部していただき、右肩上がりで賃金が上がり、地位が上がり、退職までその職場で仕事をすることが出来たわけでございます。しかし、現在ではほとんどの方が、もう定年まではいられない、早期退職制度なども殆どあります。厚生労働省の中でもそのようななかでいろんな制度作りを考えられていています。ですから自分のキャリアは自分でどのようにキャリア開発をすすめていくのかということが現在の大きな課題になっていると思います。

したがいまして、現在はその専門的な支援者としてキャリアコンサルタントという職業が必要になっておりまして、平成 9 年からは厚生労働省によるキャリアコンサルティング 2 級技能士という国家試験が実施されるようになりました。こういう方々は若者の就業を支援し、そして今、中高年の方々の退職後の人生をどのように生きるのか、働くのかということまで含めて、専門的な知識とカウンセリング力をつけて支援をするというようなことが、現在行われているところでございます。私も昨年までそこの理事として、キャリアコンサルタント 2 級技能士の

養成、あるいは試験に携わっているわけです。私自身を振り返って考えてみますと、私が送った職業生活とものすごい様変わりの時代になっているんだということを実感しております。

私は1960年から働いておりますので、現在まで考えてみますと 50 年職業生活を送っているわけです。そして私はこの間に 3 人の子供を育てながら、保育所作り等にも積極的に関わってきました。働き続けるためには保育所作りにも自分で参画をしないと駄目でしたので、とにかく一生懸命頑張って参りました。今考えてみますと、この私の子供たちも40代後半に差し掛かり、そして私が生きてきた職業人生、子供たちの職業人生と現在の学生さんたちを中心とするこれからの職業人生というのは、日本の社会そのものが大変大きく変化をしている中で、働き方、生き方が変わらざるをえないということを、実感をしております。そういう意味で、皆さんがボランティア活動によって、生きること、そして生活力を身に付けるということの大切さが実感できているのではないかと思います。

私はこの福岡県立大学に初めてお邪魔を致しましたけれども、日頃から、先程ご説明いただいた小松教授から熱い思いをいつも聞かされておりまして、特に学生の皆さんが90%近くボランティア活動に参画し、そして多くの方々が地域のみなさんとの交流を通して、さまざまな活動に参加をされているということをお伺いして、大きな感銘を受けている一人でございます。

そういう意味では、これから皆さんがお力を発揮されて、ぜひこの日本の社会を担っていただくお一人として、ご活躍いただきますことを心から祈念を申し上げる次第でございます。

私たち産業カウンセラー協会としても、こういう方々の支援のために、さらに努力を続けていきたいと思っています。

私自身の長い人生、とりわけ職業人生は先程申し上げましたけれども、本当にいろんな困難にブッつかることも沢山ございました。しかし、私自身は大変健康に恵まれたということもあったかと思いますけれども、今まで働くことが出来、そして多くの社会の人と接することが出来ました。このことは今振り返ってみますと、大変ありがたい人生だったと感謝をしております。

どんなつらいことがあっても、いつも仲間がいて助けていただき、働き続けることが出来たということは、私の人生にとっては最大の幸せだったような気が致します。そういう意味で、逆に今の若い学生の皆さんはこれから自分がどのように生き、どのような職業につき、どのような働き方をして自分の人生を構築していくのかということをしっかり考えながら、人生を切り開いていっていただきたいと思います。それから学生さんをとりまく周りにいらっしゃる地域の方々、あるいは先輩の方々、学校の先生方とともに、そういう若者たちをどのように応援をしていくのかということが、これから一番大事なことではないかなと思います。ですからぜひ、健康に気を付けられこれからの人生を、社会人としての生活になった時に困難を乗り切るために努力をしていただけたらと心から願っているところでございます。

大変短い話になってしまいましたけれども、私は今日のこのフォーラムを通じて、多くの皆さん方が、働くこと、生きる事とはどういうことなのか、そして自分のキャリアというのは、かつてのように会社に入って会社から求められて勉強するのではないのです。自分自身が必要にせまられ、そして自分のキャリアを開発するために、自ら進んで努力をし、学習をしていくということが、今一番必要になっていると感じています。

そして、私自身の人生を考えてみますと、私は1975年に先程申し上げましたように、健康の問題を取り扱う部署に異動になりました。その時に産業カウンセラーの勉強を始めました。当時私は子ども 3 人がまだ小学生だったものですから、夏休みになりますとこの九州の実家に子どもたちを夏休みになると預かってもらって、その間にスクーリングに出かけるとか、そういうようなことで勉強してまいりました。このカウンセリングの勉強も土曜日・日曜日、当時私が勉強していた時代は日曜日しかやってございませんでしたので、私自身は日曜日にいつも子供たちを夫に頼み、そして勉強に行っていました。このことが結果的に職場の中で多くの皆さんの援助に繋がり、そして私自身のキャリアの開発と、そして60歳以降の自分の人生に繋がったというふうに考えております。

そういうことを申し上げますと、大変おこがましいのですけど、私自身がキャリアの開発を

しようとか、そういう風にその当時は思ったわけではなかったわけですが、どんなことがあっても自分自身でやり遂げようという気持ちだけは持っておりました。そういうことを通して、今の私が形成をされたのだということを考えてみますと、やはりいろんな目的をもって勉強することの大切さ、そしてそれをやり通していく忍耐力だとか、あるいは継続する力というのが、私自身が健康だったこともあって出来たのだと考えています。

そういうことを考えますと、若い皆さんは、特に自分自身のキャリアは自分でつくっていく、そういう世の中になっているんだということをぜひ肝に銘じていただけたらと思います。

今、多くのところで通信教育やあるいは夜間の学校だとか、さまざまな場で自分自身が目的を持って勉強したいと思いますと、いろんなところでそのような目的に添ったものが見つかると思いますので、あきらめずにぜひ努力をしていただければと思います。

私は折角この福岡県立大学に伺い、この後の時間のお話を聞かせていただきたく思っていましたが、今日、この後また東京に帰って 6 時半から会議が待ち構えていますので残念です。皆さんのこれからのご健闘とそしてご活躍をこころからお祈りを申し上げまして、私のお話を終わらせていただきます。本日は大変有難うございました。

ちょっと早く時間が終わりますけれども、これをもちまして、今日はご清聴ありがとうございました。

基 調 講 演

「社会貢献って、なに？　～仕事と会社と社会～」

（株）資生堂　ＣＳＲ部 社会活動グループリーダー
関戸 由美子氏

皆様こんにちは。資生堂の関戸でございます。にごっていただきたく、でも腹黒い人間では決してございませんので、どうぞよろしくお願い致します。

私はなんと、人生で今日が二度目の九州上陸でございまして、前回はもう 20 数年前です。その時もやはり、小倉を中心とした北九州方面の出張でございまして、縁がないようで、でも北九州地域には縁があるのかなと思います。

そういうことで思い出しましたのが、私どもの会社は全体で見ますと、女性が７割、男性が３割という男女比なんですけれども、まだ役員における女性は非常に少のうございます。今まで二人目の女性役員が、嘉穂郡の出身でございまして、よく「関戸ちゃん、私が前いた嘉穂郡というのは、昔は炭鉱で非常に栄えたのよ」という風に懐かしく聞かせてくれたなぁということを、私の部長でもありましたので､そんなことを思い出しました。なので数も少ないんですけれども、非常に何か濃厚なご縁を感じて今日この場に立たせていただきました。

さっき、安藤先生もそれから小松先生もおっしゃって、一つ思い出したことがありまして、コミュニケーション力が大事だというお話をされていました。私、今ご紹介いただきましたように新入社員の研修などもまあ５年ぐらい、毎年３週間近くを合宿形式で新入社員と過ごしてきたんですけれども、その場においてもコミュニケーションの勉強を色々してもらっています。

中に、最近の主に学生の皆さんは、コミュニケーションというとメールかと思うのですが、まだまだ資生堂は、きちんと新入社員が自分の着任先の上司にご挨拶をする、きちんとやろうねという会社でありますので、研修中に自分の上司に宛てた手紙というのを書いてもらっています。それを私たち人事部の先輩たちが一人 30 人分ぐらいでしょうかね、添削をします。毎年色々な傑作な、気持ちはあるんだけれども、ちょっとコミュニケーションとしてというものがありまして、一つ思い出しましたのが、まあつらつらこの度私そちらでお世話になりますと、今、こちらの研修場で研修をしておりますが、着任の際はどうぞよろしくお願いします、と書くところに差し掛かりましてですね、幸い上司にも恵まれ、と書いてあるんですね。多分ここで笑える方は大丈夫というか社会人的な、コミュニケーションはおわかりいただけている方だと思うんですが、私たちの新入社員もまあ、根は良い子たちなんですが、何かそのよろしくお願いしますねという気持ちはあっても、どう書き表したら良いのか、という所はまだまだちょっと練習してもらわないと足りないかなと、そんな新入社員のことをふと思い出しました。ですが気持ちさえあれば、後はコミュニケーションのやり方というものを身に付ければ良いので、心配なさらず、どんどんと、あえて言うならば自分とは違う世代の皆さん、大人とコミュニケーションをされると、力がついていくのではないかなと、ちょっと冒頭にいきなりお説教がましくて申し訳ないですが、そんなことを思い出しました。

では早速私のお話をお聞きいただきたいと思います。今日はですね、学生の皆さんもいらっしゃいますが、もう十分先輩方もこの席にはいらっしゃいます。どなたを対象に絞ってお話をしていこうかなと考えましたが、学生さんを対象にということで焦点を絞ってお話をさせていただきますので、社会人の皆様には物足りないかもしれませんが、その点冒頭にお許しいただきたいと思ってお話をさせていただきます。

ここに書きだしたタイトルは(図 1)、言ってみれば今まさに私の心境そのものでございます。ご紹介いただきました通り、昨年の 6 月にこの社会活動グループに移動致しまして、今で丁度 10 ケ月目ですね。赤ちゃんだったら臨月で、無事に一人前の人間として世の中にというか外に出てくる、それだけの月日はたったんですが、まあまだまだなかなかこんなに働いてきた人間であってもですね、新しい所に行くとちょっと何だろうと思うことがいっぱいあります。

この後、学生さん方のパネルディスカッションで「学生が目指す社会貢献とは」というタイトルでお話をされますので、それであれば、私自身が“社会貢献”という仕事を、会社員としてはある意味初めて本格的に自分の業務として手掛けますので、仕事とか会社とか社会について、この一人の社会人がどういう風に考え、関わり合いを見出そうとしているのかと、そんな観点でお話をしたいと思いますので、その中から、何かヒントを得ていただければ非常に幸いに存じます。

少しだけ自己紹介をさせていただきますと(図 2)、最初の推販部という所がまあ、お得意先の化粧品店さんとか、販売を担当する営業担当の社員、ビューティーコンサルタント、そういった人たちの研修の企画や、実際に先生みたいなこともさせていただきました。

広報室では、主に新聞社さんの取材対応窓口として、企業活動ですとか、それから一部商品の広報なども行って参りました。

人事部では、今の男女共同参画に関するお仕事を致しまして、それから女性の管理職がまだまだ、女性がいる割には少のうございますので、管理職を育てていこうというプログラムを考えたり、資生堂という企業の理念を、世界で 2 万ちょっとの社員が働いておりますから、心をひとつにするために、どういう理念をこの会社は持っているんだろうかということを伝えていこうと、そういうお仕事もさせていただき、採用では、学生さんと一日何十人もとお目にかかったり、新入社員研修をやってみたり、そんな風な経歴で今までを過ごして参りまして、昨年 6 月に今の部署に異動したということです。

今日は三本の柱でお話をさせていただきます(図 3)。

1、社会貢献の入口に立って何を考えたか、2、ちょっとお手元のですねレジュメとは少し文言を変えさせていただいた点お詫びでございますが、今、私自身の“糧”となっている驚いたこととか学んだこと、三つ目、皆様へのご提案として、社会貢献する自分の軸をこんな風に持ってはいかがでしょうか、そんなお話をさし上げたいと思います。

ではまず一つ目の(図 4)、社会貢献の入口に立ってと、いうところからお話をさし上げます。

ＣＳＲ部に着任して感じたこと(図 5)、ここから話を起こしたいと思うんですが、まあそんなことで、今働き始めて２９年目で、これだけ働いてもですね、なんかやっぱり同じ会社の中だけれども違う仕事をするというのは、やはりドキドキするものです。良い意味でもドキドキしますし、ある意味不安なところもあるんですね。なまじ働いてきただけ、いい加減いい歳してそんなことも出来ないのとか情けない自分に新しい職場というのは直面せざるをえません。そういう時に、一体自分のよりどころって何だったんだろうかなと、なんかそういう自分の足場を確認したい心境になるんですね。

今までと職場で交わされる言葉も違ってきます。例えば人事部の時でしたら、研修体系とか、それから行動発揮能力とか、マネジメントとかそんな言葉が飛び交いますが、今やっぱり社会活動ですと、全然あの、ＮＰＯさんＮＧＯさんとそういう団体さんの名前がちょっと違ってきているわけですね。そんな新しい言葉だらけの世界へ飛び込みまして、社会課題の解決に取り組む皆さんと、一体どういうふうに関係を築いてどういうふうに協働していったら良いのかなと、そもそも社会って何なのだろうと、改めて何かその根本的なところの問いを自らちょっと発してみたんです。

社会って何なんだろうなと考えた時に、思い出したことがございます(図 6)。それがこちらの「会社と社会は字が同じです」という言葉でございまして、これを言ったのはですね、今、名誉会長をしております福原という人です。非常にあの社長を 10 年くらい勤めて、毎年 1 回創立記念日にこういうようなメッセージを社員に向けて発し続けてきた人なんですね。これもまあ、簡単な日本語としては簡単です。「会社と社会は字が同じです」。ところが含んでいる意味を考えますと、非常に多面的というか多様な解釈が出来る言葉でございま

す。

例えば会社の中では現に通じていることが、それが社会で通じますか、という問いかけにもなります。やっぱり社会の中に存在している会社なのだから、会社の中だけの世界で完結しないで、社会とこう空気が流通しているわけですよね、だからやっぱり社会にも通じること、という広い視野で考えていく必要があるんじゃないだろうかと、そんな風な示唆をしてくれる言葉だったんですね。

こんな言葉を思い出した中で、ハッとそうだと、会社は社会と繋がっている、で、私はその会社の一員である。だから自分が良くなればきっと会社も良くなるし、会社が良くなれば社会も良くなっていくだろう、何かこれは、社会が良くなっていったら良いなっていう社会貢献の理念と同じじゃないかなと気づいたわけです。

なので今まで 29 年間、社会と繋がっている会社という一つの場で日々修行だったわけですけれども、そこで色々学んだこと、自分の中の基礎基本になっているわけですね。だからもうその基礎基本を使って自分の周囲のまず仕事、より良い仕事をし、そうすればきっと何らか会社は良くなっていくだろうし、それが微力だけれども何か社会の役に立つんじゃないかなとこう考えれば、いきなり何か頂上を目指して「よし社会をよくしてやろう」とか力むのではなくて、まず自分の目の前の仕事をきちんとやることから始めよう、そのためには今まで 29 年間たくさんの先輩が教えてきてくれたこと、これを大事にやっていけば良いじゃないかと、そんな風に自らの気持ちを落ち着けることが出来たわけです。

ということで、この二つ目の(図 7)、今“糧”となっている「驚いたこと」「学んだこと」これを主に学生の皆様に向けてメッセージしていきたいと思います。

1 つ目社会の掟編、としまして「花椿」誌、これは私が 22 歳の出来事でした(図 8)。

資生堂はお化粧品、物を販売するのですが、その裏付けとして「美容」という理論がございます。その美容を学ぶことが私が着任した部署で必要でしたので、美容部員、昔の言葉でいうと美容部員が入社して初めて受ける 2 か月半の研修を受けるところから、私の資生堂人生が始まりました。

まあ仮免許と言うか本当は美容部員ではないのですが一生懸命勉強をしまして、コスチュームも借りまして、実際に店頭で販売等もしてみました。

その時にですね、研修の中で、私どもの会社に「花椿」という雑誌がございます。数年前からある一部の本屋さんでも販売するようになりましたが、美容とかファッションとか、少し先進的な情報をご愛用者にお届けする雑誌です。それは教育の自分の研修の時ですね、先生から、これは私どもの資生堂の化粧品を愛用してくださるお客様に、そういう美容とかファッションの最新情報をお伝えするものですから、その意味を説明して丁寧にお渡ししてくださいねと教わったんです。

早速店頭にいた時に、その月にお配りする「花椿」誌、到着してほやほやだったんですね。よし、これは習った「花椿」誌だなと、じゃあお客様にお渡ししようと思いまして、店頭で早速あるお一人のお客様にお渡しをしました。そうしましたら、ちょちょっとこう先輩から呼ばれまして、「花椿」誌ってどういうものかわかるっていう風に言われたわけですね。かくかくしかじかと、先生に教わった通りのことを答えたんです。そうしましたら先輩は、確かにそうなんだけれども、これはこの化粧品店さんが買ってくださるものだと。ただではない。したがって化粧品店さんが経費、お金をかけて購入したひとつの販売促進のための道具であるから、ある程度やはりお買い上げをいただいたお客様にお渡しをしないと現場では見合わない、という風に言われたんです。ということで、まず掟、基本と応用とは、必ずしも一致しないものだと、そのとき、その場で、もっとも適した価値軸に沿って考え、行動することが社会では必要なんだなあと、まあちょっとショックではありましたね。

学校までは割と先生に教わった通りちゃんとやっていればそんなに、何と言うんでしょうか、本道から離れたことにはなりにくかったように感じていたんですけれども、美容部員の勉強をしてマジメに勉強している私が先生に言われた通りのことをした、でも現場では、そうか、これってお金がかかっているんだなっていう、だから誰でもかれでもはいはいと配って良いのではなくって、“お金”とそれから“お渡しをする”という、この素材、バランスをとりなさいという、それが現実だったんですね。なので、いつも必ずしも基本通りいかないこともあるよと、その場に最もふさわしい自分の行動は何かを考えなさいという、ちょっ

と苦い掟をこの時教わりました。

さて次、苦いだけではなくてですね、先輩の愛を感じる出来事もございました(図 9)。

それが、出来事自体はちょっと悲しい思い出です。仕事先で、置き引きに遭いました。入社 3 年目です。24 歳の時。これはですね、何かお化粧品店さんに、なんかこうお話を、取材か何かに行ったんですね。先輩と一緒に。で、会社の車の中に自分の貴重品も含めて、今日はご挨拶だけだからすぐ車に戻るかと、言って油断して置きっぱなしにしましたら早速盗られてしまいまして、これ人生初めての置き引き体験だったもので、物を盗られたっていうそれもショックだったんですけれども、そういう悪意、人の悪意を浴びてしまったって言うんですか、何かすごく悲しいと言うかショックというか、私もまだ 24 歳で若かったので、すごくこうがっくりしてしまったんですね。

すぐに警察に届けて、そこは千葉だったんですけれども、一目散にでも家に帰りたい気持ちになったんですが、まあもう夕飯時でもあったので、その地元の販売店、販売会社の私どもの部長さんがまあまあと、おなかもすくとね、余計悲しくなるから夕ご飯でも食べましょうと言って、私と先輩を誘って近所にご飯を食べに連れて行ってくれたわけです。道すがらもずっと、なんか置き引きなんてそんな目に遭ってしまったとずっとうなだれて、道のこのアスファルトの色しか記憶にないんですよ。

フっと気づくと私の前を歩いていたその営業部長さんが、ある化粧品店さんに入っていかれたんです。「これは、目の前を資生堂の人間が素通りするのは大変失礼ですので、近所なのでちょっと寄りましたとごあいさつに行かれるのかなあ」と思って、先輩と外で待っていたわけですね。しばらくしてその営業部長さんが戻って来られまして、フっと、はいこれって私に手渡しされたんですね。夕闇が迫ってましたので、何だろうなあと思って見ると、1 つの化粧ポーチ、男性はおわかりでしょうかね。女性版信玄袋みたいな、お化粧品とかを入れておくようなちょっとしたケースなんですけれども、えっと思って、何だろうと思ったんです。そしたらその営業部長さんが「女の人はこうゆうものがないと不自由でしょ」とおっしゃって、中を見たらハンカチが 2 枚入っておりまして、それだけやると、どんどんまたすたすたと歩いていかれたんですね。ということでまあこう、ご挨拶もあったかもしれないんですけれども、なんかやたらしょんぼりうなだれている私に、ハンカチとちょっとした物を入れるものを買ってすっと手渡して、また何気ない顔をして歩いて行かれたんですね。あまりの思いがけなさというか、ええってこう、嬉しいより先に何と言うんでしょうかね思いがけないというか驚きというか、だんだんまあ思いやりというか、優しい人なんだろうと後になってこう、だんだんじわじわと感動とか感激っていう気持ちが湧き上がってきまして、なんかこうでもお礼の言葉がしばらくは言えなかったですね。ここで先輩の愛ということで私が思ったのは、誰かが意気消沈している時、押しつけがましくない“救いの手”を差し伸べられる大人になろうと、まだ入社 3 年目ぐらいの私はそういうふうに思いました。

完全にこう、よく私の気持ちというか、冒頭に申し上げましたように女性の多い会社なので、割と女性の気持ちを理解する能力は資生堂の男性は鍛えられていくんですね。なのでとてもきめ細かい心遣いをしてくれる男性が、世の中の平均よりは多いような気がするんですけど、なんか本当にうなだれきっていた私に、まあまあ気を取り直して元気にねっていう気持ちも含めて、そんななんかさり気ない心遣いをしてくれたという、今だにちょっとこう思い出すと本当にその時の気持ちが甦るって言うんですか、なんか大きな温かいもので包まれたなぁということを思い出します。

では次、ちょっと美容編ということでメーキャップのお話を、これもですね私の身に付けたことに繋がっていくので、メーキャップを題材にお話をしていきたいと思います(図 10)。男性にもわかるように努力してお話したいと思いますのでご一緒にお聞き願います。

では、女性でお化粧をなさる女性であれば、こんなことをお聞きになられるでしょうか(図 11)。リキッドタイプ、液体状、クリームタイプ、もうちょっとこう本当にクリームみたいにもうちょっと固まっているタイプのファンデーションですね、お顔につけるファンデーションは、指先で軽く肌をたたくようにしてつけます。こうゆう風に、お買い求めになられると多分販売する人はお伝えすると思いますが、果たして、それはなぜなのでしょうか。

顔色を整えるファンデーションというものには、リキッドタイプとかクリームタイプとか、あと簡単につけられるパウダリーファンデーションというのがあるんですけれども、その簡単につけられるものはただサーっと顔の上をパフで滑らせれば良いんですけど、こういうちょっと液体とかトロンとした感じのファンデーションはですね、軽く肌をたたくようにしてつけて下さい、と必ず教わります。

なぜだと思われるでしょうか。ここでちょっと美容という理論が顔を出します。

「皮溝」と「皮丘」(図 12)。こういう言葉をお聞きになられた、あ、でもこちらはいらっしゃるかもしれませんね。保健の中で。皮膚、今ちょっと照明が暗くなっていますが後ほど手の甲などをご覧いただきますと、細い線が走っています。それを皮膚の溝と書きまして「皮溝」と言います。その溝と溝で挟まれたところが「皮丘」、まあ丘になっているわけですね。

きめが細かい肌という風に表現する時の、この皮溝と皮丘がどうなっているかと言いますと、密に皮溝が走っておりまして、皮溝と皮溝で挟まれた間が整った三角形の状態なんです。しかもふっくらしていると。そうゆう皮溝と皮丘の状態が出来ていれば、遠目で見て、「あ、きめが細かい肌ですね」という肌になるんです。

従いまして、皮溝と皮丘、これは拡大するば相当でこぼこしているわけです。つるんとして見えている肌も実は、拡大するとでこぼこしている。従って、たたくようにつけないとデコボコが埋まらない。なので綺麗に見えるためには、たたくようにしてつける。なので 1 つ動作をお伝えするにしても、「人の肌が出発点」になっています。これもへ～と思いました。

それからもう一つ、質問(図 13)。「眉を長めに描くと、小顔に見えます。」これも最近は小顔小顔と言わなくなりましたけれども、これは一体なぜでしょうか。

これもですね美容理論なんですね。すいません、こんなで恐縮ですが、メーキャップした時に逆三角形に作りますと、安定した顔立ちに見えます(図 14)。更にですね、ここが底辺、眉と眉の間のＡとしますね。はみ出し部分と書いてあります。このはみ出し部分がポイントでして、眉毛を長く描きますと、いかがでしょうかこのはみ出し部分の面積が小さくなります。つまり、はみ出し所が小さいから小顔に見えるという理論なんですね。もちろんその流行もありますし、顔立ちによっても違うので一概には言えませんが、基本的な考え方はこうなんです。ということで、目とか鼻、「パーツ」と言うんですけど、どう配置されているかをよく見て、その結果メーキャップを設計するというのがメーキャップなんですね。(図 15)

これも「人の顔立ちが出発点」でメーキャップをしていく、というわけなんです。

まあこんなあたりですね。まあ社会に出て、私はそれまでほとんどお化粧しなかったんですね(図 16)。お化粧を習い始めてまあ綺麗な色を付ければ良いのかなあぐらい実は思ってたんです。ところが、理論を習うにつれて、あ、違うなと、何でもメーキャップってこう表面に現れるものでもその裏付けという理論があるのだなということを知ってすごく驚きました。

理論を知れば、だいたいどんな局面にも対応出来ていくということなんですよね。

ということで、美容における私の学んだこと(図 17)。メーキャップや、肌のお手入れという、「美容」を学んで「現象を見ないで、本質を見よう」と、こういう学びを得ました。

ただ教わるだけの情報で終わらせるんじゃなくって、その奥にあるもの、土台にあるものって何なのだろうと考えるくせをつけられてはいかがでしょうか。

現象だけを追っていきますと、例えば世の中現象だらけです。百の現象があって、現象だけを追っかけていったら、百の追っかける法則を考えないといけません。ところが、百の現象を見て、あ、現象百だけど、本質は一つだなと思うことがあるかもしれません。そしたら一つのことだけを考えて、一つの対応をしていけば、百の現象にすべて対応出来ちゃうんですよね。

あるいはほかの現象に直面した時に、あ、この現象はあの時のこの本質の解決策を用いれば良いなという風に、問題解決の力にも繋がるんじゃないかと思います。ですからどうか、現象だけに目を奪われないで、本質は何かという、底にあるものまで見通す練習ですね、されることをちょっと偉そうですが、社会人の先輩としてはぜひお伝えしたいと思います。

こんな風に、“糧”となっていることをもとに、

今の社会活動という仕事をやっていけばいんだという風に落ち着いたところで、では三つ目(図 18)、逆に、社会貢献という切り口で、どんな軸って言うんでしょうかね、価値観を自分の中にしっかり持っていけば良いんだろうかという、そちらの角度で整理して少しお話をしてみたいと思います。

社会貢献する自分の軸、その 1 としてみました(図 19)。自分が「主体」であろう。

私も、小学校はまだですかね、中学生くらいになりますと、先生から良く「主体的になりなさい」とか言われて、これ会社に入っても「主体的に」という言葉は言われ続けますね。上司や先輩から。学生の皆さんも、なんだ当たり前じゃないかと思われるだろうし、いつもいつも言われてるよって思われるかもしれないんですけれども、ちょっとお勧めとしてですね、「〜たい」ということを大切にされると良いのではないかと、お勧めします。どういう意味かと言いますと、不平とか不満をですね裏返してみると、〜したいという気持ちの表れだと思うんですよ。

例えば、せっかく社会貢献のゼミをとったのに全然なんかおもしろくないと思っている方がいたとします。ま、本学ではそんなことはないと思うんですが、全然面白くないという不平や不満をひっくり返してみると、色々学びたいんですよね。社会貢献について。学んで何か社会貢献をしていきたいなと、そういうしたいと思う気持ちがあるからこそ、なんかこう表向きは不平とか不満みたいに、そっちの回路にいってしまうんです。ところがよく自分の心を見てみると、自分の心の中をちょっと覗いてみると、結構ですね、あれやりたいこれやりたいっていう事が埋まっているはずなんです。なのでもし不平とか不満を感じたら、これって〜したいの逆かなとひっくり返してみてみると、すごくですね、そうだ私は〜したいという気持ちを持っているじゃないかって思えると思うんです。私は何をしたいのかな、不平や不満でなんか頭がいっぱいになった時こそ、そんな問いかけを自らにしてみてはいかがでしょうか。

これ実際ですね、3〜4 年ぐらい前に、入社 1 年目の終わりぐらいですか、の若手の研修の時にちょっとやってみたんですよ。

資生堂に入って、よくこれも人事部の世界ではよく聞きます“リアリティショック”って言うんですか、こんなはずじゃなかったと落ち込む人がすごく多いです。私はもっと一日でも早く世界の市場に行ってかっこ良い営業をしたかったのに、そんな、何軒かの化粧品店さんを担当するだけで私はいつ世界に行けるんだろう、語学力を早く発揮したいのにとか、色々思うんです。で、そういう不満が溜まってきているぐらいが 1 年目の終わりぐらいなんですね。考えていたことと現実が違ったっていうショックで不平不満だらけになる、そういうタイミングでの研修でしたので、ちょっと時間を取ってこういうエクササイズと言うかワークをしてみたんですよ。そしたら何か見てみると、最初は久しぶりに同期で集まって、でも何か思ってたことと違ったよねって、これぐらいの研修の大きな研修場がどんよりしているです。その後四つぐらいの分課会でわかれて、この〜したいっていうワークに変えたところ、だんだん教室の中があったまってきた。そんな経験があります。ぜひ、「〜たい」というこの語尾を使ってみられることをお勧めします。

この、「〜たい」ということで、ちょっとご紹介したいエピソードがあるので、次にお話したいんですけれども、そのエピソードを話すために、一つちょっと宣伝方々になりますがお話をさせていただきます。

資生堂の、二つの“授業”(図 20)。

私どもの社会活動グループが扱っております社会貢献を目的とする 2 つの授業があります。これは社会貢献でもあるんですけれども、もう一つの側面では実際に授業をする社員のやりがい、それから資生堂で働いていて良かったなという資生堂への親愛の心、ロイヤルティーと言いますが、それを高めるという、やりがいの挑戦ということにも寄与する授業があります。

一つは、社員なら誰でも先生が出来る資生堂子供セミナーというのをやっています。これは主に、小学生 5 年生の男女を対象に、日焼け・紫外線の害、それからその害から身を守りましょうという知識と、実際に守るクリームの塗り方、それと清潔に顔も洗ってねと、意外に顔を洗っていない小学生が多いので、ちゃんと洗わないとだんだんニキビができるようになるよと、いうような話をすると、私どもの主軸である美容ですね。美容の考え方をもとにそんな内容の授業をやっています。

もう一つは、最近理工系に進む学生さんが少なくなってきたということで、国としての社会課題

ですから、これも資生堂で出来ることはないかと考えて、理系の社員がですね、中学校とか高校に伺いまして、主に進路を選ばない人の多い女性なんですけど、女子中高校生を主なターゲットとしまして、理系の主に女性の社員ですね。研究所の人たち、が理系に進んだ自分の今の姿を、キャリアを紹介することで、この学びがこんな風に活きてて今こんな風なやりがいとか楽しさとか、ちょっと苦労もあるけど頑張ってますと、そういうことで理科を学ぶということの夢を提供しようという授業､この二本立ての授業をやっているんです。

今、ちょっとお話しようと思いましたのは、一つ目の方の資生堂子供セミナーにおけるエピソードです。

ある財務部門にいる女性なんですけれども、非常に熱心に何度も授業の担当をやってくれるんですね。やがては自分も自立して主軸の先生役、児童の皆さん 5～6 人に一人の社員がついて、大挙して小学校に押しかけますので、リーダー役が一人必ず必要なんです。このリーダー役が出来るようになりたいと、こんな風な夢を語ってくれてまして、社内のネットで～小学校に行きました、こんな風に社員の講師が活躍してますと紹介するんですけど、それを財務部の同じ職場の男性社員が見て、こんなのだったら自分もやってみたいという風に言ってくれていると、非常に自分の周辺が盛り上がっていますよという話をしてくれたんですね。

それだけでも非常に私は嬉しかったんですけれども、もうちょっと話を聞いていたら、彼女自身にやっぱり根っこがあったんですよ。彼女はですね、親御さんの転勤でマレーシアにいたことがあって、非常に日差しが強いですから日焼けをしちゃって、痛くて困ったと。その時にお母さんが、これもたまたまと言いましょうか、資生堂の販売の所に彼女を連れて行って、そしたらそこの美容部員ですね、が小さい彼女の腕に日焼け止めを塗ってくれたと。実際その日焼け止めを塗り始めたらひりひりしなくて本当に良いなと思った。何かそれがすごく幼心に印象に残っているらしいんですよ。なのでそういう授業をやり始めたということが分かった時に、自分の体験をもとに子どもにだって日焼けから身を守るっていうことが大事なんだと伝えたいと思った、だからやがては主軸になれる講師を目指してます。という風に言ってくれたんですね。

この授業は別に、はいあなたがこの授業の先生やりなさいって特に子供セミナーは全く名のりあげに委ねてるんです。自分の自主性に任せて。でも彼女は自分の体験で、本当に助かったし、子どもにも大事よね、これを伝えたい、やっぱりたいがあったなあというのがつい先週ぐらいの出来事でした。なので今日皆様にお伝えしたくて、そんなお話をさし上げてみました。

では次に、ご提案としまして、その 2(図 21)、これも実はお手元のレジュメと表現と言うか変えておりますのでお許しいただきたいんですけれども、相手軸で感じ、考え、行動しよう。

これはですね、自らの戒めとして今こういう風に思っています。と言うのは、社会貢献そのものはやっぱり大変良いことですよね。何かそのお役に立てた時に、お相手の方って喜んでくださいますよね、ありがとうって。なので良いこと故に逆に自己満足にならないように、気をつけないといけないなあという風に思い始めています。

貢献するってどういうことなんだろう、役に立つってどういうこと、それは本当に相手が望むことなのだろうか、一時的に終わらないかな、持続性はあるかな、私たちがこの差し伸べた手を引っ込めちゃった後も、お相手は自分の足で立ち上がれるんだろうかと、色んな問いかけを毎日の仕事の中でしている最中なんですね。

例えばですね、この前のスライドで社会貢献の仕事として二つの授業のご紹介をしましたが、寄付のしくみも私どもで持っております。花椿基金と言いまして、八つの団体さんに対しまして、社員は給料引き、一口百円から、いくらでも良いんですけど、百円から天引きで積み立てて、社会問題を解決しようとしている団体さんに寄付をする、そういう寄付をする仕組みを運営をしております。八つ団体さんがあるんですけれども、一体、まあ皆さんががそれぞれの思いで社会問題に取り組んでます。私たちとしますと、社員が自分の血と汗で頑張って働いた給料、たった百円であっても自分の営みの結果、大事なお金なんですよね。どういう風な形で支援をするために、このお金を寄付したら良いのかってすごく重要な問題なんです。その時に支援する団体さんと十分お話をして、さっき申し上げたように、本当にその団体さんの活動そのものが解決に、解決してほしいと願ってる

人に役に立っているのだろうかと、そこまで色々お話をじっくりし合いまして、お金を寄付するようにしています。

例えば一回バンと寄付して、はいサヨナラが良いのか、それとも例えば、まだまだ世界では非常にしいたげられている女性も多くてですね、自分は家畜、牛とか馬以下、そういう風に教育と言うか洗脳ですね、されている女性も非常に多いと聞きます。そういう方たちに対して、お金をあげてじゃあこれで何か職業を持ちなさいって言うだけではとても足りないので、実際に職業支援の学校に行ってもらい、その先生を支援することで継続的に教育が受けられて、自分の、私は家畜以下の存在なんだと思っている女性の意識を変えて、実際に稼げる一人の経済的に自立出来る人になっていく、その道のりは非常に長いんですけれども、何が貢献なのかということまで考えないといけないなという風に思っています。

これはですね資生堂的な言葉で言うと、「おもてなしの心」だと思います。

店頭でお客様に接するものも、そうでないものも含めまして資生堂って「おもてなしの心」っていうのを大事にしておりまして、やっぱりおもてなしの心というのは相手が喜んでくれて初めて達成するものなので、やっぱり「相手軸」なんですね。

これ一つ目の、その１では主体であろうと、自分が自分の主体であろうと言いましたけれども、主体性の高い自分になったら今度、感じたり考えたり行動する時、お相手の立場側になってやってみてぜひ下さい。そんな風に思います。

こんな風にですね、相手と色々関わり合いを持っていく中で、非常に学んだり気づいたりするっていこうことが多いですね。私もその団体さんから色々と勉強をしている最中なんですけれども、相手に役に立つとはそういうことなんだなと、単にお金をポトっと瞬間的に落とすことじゃないんだなと、すごくもしかしたら当たり前の事かもしれませんけど、まだまだ私のレベルではそんなことから気づいておりますが、すごく大事な軸だというふうに考えております。

それでは、その 3、迷ったら、原点を確かめようということです(図 22)。

主体性が高い自分、自分で自分の主体になる、そんな自分で相手の気持ちに寄り添って社会貢献をしていく、でも色々そういう活動を繰り返す中で、迷うことも多いと思うんです。そういう時こそ、原点というか、そもそもってなんだったっけなという風に、ちょっと気持ちを落ち着かせてみてはどうでしょうか。

資生堂の社会貢献活動には三つの柱がございまして、一つが女性と化粧、そして二つ目が環境、そして三つ目が文化。この領域に重点を置いて社会貢献の活動をしていこうという、社会貢献の原点としている考え方があります。ですので、本当にやったら良いことは世の中にいっぱいありますね。本当に今の部署に引っ越してきて、こんなに救いを求めている人はいるし、社会課題って色々あるな、皆さんそれぞれの現場でそれぞれの思いを込めて活動しているので、何か役に立てたら良いなと思うことは世の中に満ち溢れていますね。すごく今勉強しながら思っています。

でも資生堂として出来る事、全てにはとてもお力を貸すことは出来ませんし、逆にのべつまくなしみたいな、そうじゃなくて資生堂のポリシーがあるだろうと、資生堂の考えをもって役に立っていってこそ筋が通るんじゃないかなということですので、その三つの重点領域というのは非常に大事にしています。

また何かこの活動って、私たちがやっていこうという風にみんなで了解し合っている活動だっけな、とういことを迷った時ほど確認します。

また、そもそもですねこの三つの活動と言うか重点領域の遥か、もう本当の大本、資生堂という会社の大本がある意味私の原点ですね。資生堂という会社はですね、、名前が付けられた「資生堂」というのはですね、中国史の四書五経っていうのをお習いになったかと思いますが、その中に桔梗という、元々3～4000 年前の占いの本、そういう天体の運行を見ながら自然の摂理をもとに占いの本を作られたんですけど、時代がくだってくるにしたがいまして、人としての行動のあり方の参考書になっていったらしいんです。

日本で資生堂が出来ましたのは明治５年ですので、そのぐらいの人たちはそういう中国の古典を人としての道のあり方を学ぶ本として読んでいたはずです。私たちの創業者がその中から、天と地の恵みをたたえているところがありまして、天は全てを通しそして恵みを大地に与えると。地面は天の恵みを受けて新しいものを生み出していく、

それも天の法則に従いながら、今までになかった新しいものを全てのものを生み出していくそれが大地だ。大地ってなんて素晴らしいんだろう。って書いているところがあるんです。それが資生堂なんです。

万物とりて生ず、全てのものをその大地の恵みの中から生み出していく、だから私たちの会社も創業者はそうゆう理念を込めて、自然の恵みに感謝しながら新しいものをつくっていこうよと、この桔梗の文面に感動して名前にいただいたんです。なので、私たち資生堂の社員一人一人もですね、色んな所で色んな仕事を本当に色んなばらばらな仕事をしているんですけど、必ず原点は資生堂ってどういう意味だったっけ？というところから立ち戻るようにしているんです。

それがそれぞれの部門の仕事の中に降りてきて、今私がおりますＣＳＲ部という所では、女性・化粧、環境、そして文化、この三つに的を絞っていこうねとやっているわけなんですね。だからそのそういった原点にいつも私も立ち戻ってですね、資生堂という会社の原点非常に私自身が共感するところでもありますので、迷った時ほど原点に戻っています。

ということで、皆さん今社会貢献という活動をなさる皆さんにとって、自分の何がしたいのかなという気持ち、ぜひ自分の気持ちを覗きこんで、自分はこうしたいという夢ですね、忘れないで欲しいです。そして活動していく時に、でも自分一人でやっていては一人よがりなので、相手にとってこれは本当に良いことなのがどうか、役に立つの、そんなことを相手側にいってみて、考えて欲しいです。

そういう日々活動しながらも、やっぱり沢山迷うことはあると思うので、一番最初の自分の原点とか理念とかこれは自分の夢でしょうかね、皆さんの場合、そこにぜひ立ち戻って頑張っていただきたいなと思います。

私も 29 年働いてきまして、毎日毎日まだ修行の日々が続いております。20 代、会社に入った頃は、50 代の、昔から老若男女非常に豊富な会社ですので、50 代の女性も何十年も前でも沢山働いてたんですけれども、50 代になったらもうちょっと楽に働いているのかなと思っていたらとんでもなくて、まだまだ修行が続いています。

こんな私が時々若い方と話していて今気になるのは、「心が折れる」という言い方がちょっと前から流行っていますね。もし深刻なね、本当に心が折れるということが深刻なことであったら本当に、もしそういう話を聞いたときは、誠実に一緒になって聞かないといけないと思うのですが、非常に簡単に「もう心が折れる」という風におっしゃているのを聞くと、逆に、あ、それだったら折れてみた方が良い、と思うんです。折れてみた後、治していく力っていうのがあるので、自然治癒力と言いますか、折れて治して、ていうか治って、治してかな、そうしながら段々強くたくましくなっていくんですね。だからかすり傷とか心が折れるとかっていうのは逆に、より頑丈な自分と言うんですか、タフな自分、それもしなやかさも持ちながらのタフな自分になっていくチャンスなので、心が折れることを怖がらずにですね、よし折れてやろうぐらいな気迫でもって、夢の実現に向かって頑張っていただきたいと思います。

そんな中で必ず磨かれていきますので、ぜひ負けないで、心が折れたぐらい何てこともありません、深刻な場合を除いてですよ、折れたら、「あ、折れた」と思って、じゃあ治せば良いや、治るから、私治す力あるなとぜひ安心して、夢に向かって立ち向かっていっていただきたいと思います。

そんなメッセージを締めくくりにさし上げまして、私のお話を終えさせていただきます(図 23)。

今日はどうもご清聴ありがとうございました。

社会貢献って、なに？

～ 仕事と会社と社会 ～

2011-3-3

㈱ 資生堂 CSR部
社会活動グループ
関戸　由美子

1

自己紹介

1982年　推販部

1995年　広報室

2000年　人事部

2010年　CSR部　社会活動G

2

本日お話しすること

1. 社会貢献の入り口に立って
2. いま、”糧”となっている
   「驚いたこと」「学んだこと」
3. 【提案】社会貢献する自分の軸

3

本日お話しすること

1. 社会貢献の入り口に立って
2. いま、”糧”となっている
   「驚いたこと」「学んだこと」
3. 【提案】社会貢献する自分の軸

4

CSR部に着任して感じたこと

5

「会社と社会は 字が同じです」

6

本日お話しすること

1. 社会貢献の入り口に立って

2. いま、"糧"となっている

「驚いたこと」「学んだこと」

3.【提案】社会貢献する自分の軸

7

社会の掟 篇

「花椿」誌（22歳）

「基本（教科書）と応用（現場）とは、必ずしも一致しない」

「そのとき、その場で、もっとも適した価値軸に沿って考え、行動する」

8

先輩の愛 篇

仕事先で、
置き引きに遭う
（24歳）

誰かが意気消沈しているとき、
押しつけがましくない「救いの手」を差し伸べられるおとなになろう。

9

美容 篇

ここでちょっと

メーキャップ の

お話を・・・

10

リキッドタイプやクリームタイプのファンデーションは、指先で軽く肌をたたくようにしてつけます。

それは、
なぜ？

11

「皮溝」と「皮丘」

・・・を意識する、
その結果の動作

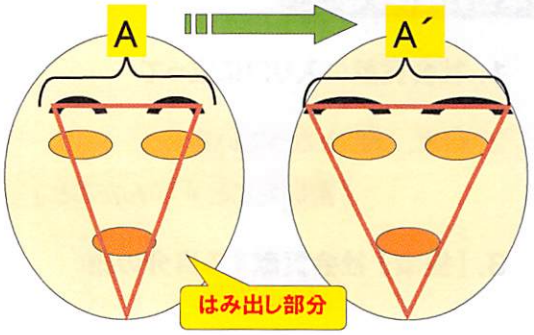
人の肌が出発点

12

眉を長めに描くと、小顔に見えます。

それは、
なぜ？

13



14

目や鼻などの「パーツ」の配置

・・・を観察した、その結果の設計

人の顔立ちが、出発点

15

16

美容 篇

メーキャップや、肌のお手入れという、
「美容」を学んで

現象を見ないで、
本質を見よう。

17

本日お話しすること

1. 社会貢献の入り口に立って
2. いま、"糧"となっている
「驚いたこと」「学んだこと」
3.【提案】社会貢献する自分の軸

18

【提案】社会貢献する自分の軸　その①

自分が「主体」であろう

おススメ・・・「～たい」を大切に

19

資生堂の、2つの“授業”

20

【提案】社会貢献する自分の軸　その②

相手軸で感じ、

考え、

行動しよう

21

【提案】社会貢献する自分の軸　その③

迷ったら、原点を確かめよう

22

社会貢献って、なに？

～ 仕事と会社と社会 ～

ご清聴、ありがとうございました。

23

サークル名　　つくしんぼ

発 表 者　社会福祉学科 2 年生
伊藤彩（部長）　緒方詩織（副部長）
活動分野　障害児の支援活動
部 員 数　30 名
ミーティング　毎週木曜日　　3203 教室

あすなろ運動会

こんにちは、つくしんぼです(図 1)。今からつくしんぼの活動についてご紹介したいと思います。

つくしんぼは、30 年ほどの歴史のあるサークルです(図 2)。

もともとは、社会福祉協議会と、障害児の保護者の方々が、余暇支援を目的としてつくられたものでした。そこに、学生がボランティアとして参加し、次第に学生が主体となり現在の形になりました。

つくしんぼは、障害児を対象としているサークルです(図 3)。保護者や子どもたちが、安心して楽しく活動できるように、学生自ら企画を立て、例会を開き交流しています。

部員数は、社会福祉学科 25 名、人間形成学科 2 名､公共社会学科 3 名の合計 30 名で活動しています。

つくしんぼでは、年間を通して、このような活動を行っています(図 4)。

今日は、その中のあすなろ運動会、例会、フレンドシップツアー、キャンプについてご紹介しようと思います。

まずは、あすなろ運動会についてです(図 5)。

私たちつくしんぼは､学生ボランティアとして、運営をサポートしました。

今回の運動会では、社協の方々や施設の方々と活動したので、地域との連携の大切さを感じました。また、工夫次第で子どもも高齢者も障害のある方も一緒になって楽しめることや、一緒に同じ競技に参加したことで、同じ目標があると一致団結出来ることを学びました。

続いて定例会についてです(図 6)。定例会とは、毎週木曜日の放課後に行う話し合いのことです。

定例会では、季節に合った遊び、子どもたちが理解しやすい遊びを考えたり、遊びで使う道具を作ったりしています。

その際、注意していることは、障害や身体能力等の情報を事前に把握すること、その情報を学生同士で共有すること、危険予測することです。

続いて例会についてです(図 7)。例会とは、障害を持った子どもたちと一緒に活動する会のことです。

例会では、子どもの体調など細かな変化に気づくことや、みんなで安心して楽しく活動出来るようにすることを心がけています。

今後の課題は、保護者の方とコミュニケーションをとっていき､信頼関係を築いていくことです。また、まだまだ危険予測が足りていないので、細部にまで気を配れるようにしたいと思っています。

続いてフレンドシプツアーについてです(図 8)。フレンドシップツアーとは、障害があることにより、外出することが困難な方々と、ボランティアによる日帰り列車の旅のことです。

フレンドシップツアーでは、車椅子の方がたくさん来られるので、自主的に学内で先輩たちから車椅子の押し方などの指導を受けながら練習しました。

毎年､私たちは門司港に旅行に行っています(図 9)。一般の観光客の人たちもいる中で、体調を気にしながら一緒に買い物をしたり、イベントを見たり、お昼ご飯を一緒に食べて楽しみました。

フレンドシップツアーを通してわかったことは、移動する時に段差などが多くあり、車椅子での移動の困難さを感じ、障害を持っている人だけで旅行をするのは現状では難しいということが分かりました。

しかしその中でも、障害を持つ人に対して公共料金が減額されるなどの制度があり、様々な制度を身を持って体感することが出来ました。

つづいて、つくしんぼキャンプについて紹介します(図 10)。

つくしんぼキャンプは社会福祉協議会が主催しているもので、小学生から高校生までの一般の子どもや、障害児の子どもたちを対象とした二泊三日のキャンプです。

学生が主体となって夏休みに集まり、二週間かけてキャンプの準備をします。

このキャンプでは、例会での知識や経験がとても生かされます。危険予測はもちろん、みんなが安心して楽しく遊べるゲームを今年は 16 個も考えました。

そして当日は、子どもの体調管理をしっかりすることを心がけました。他に大切なこととして、周りの状況を把握することがあります。今年は夜須高原に行ったのですが、私たちだけでなく、施設を利用している人はたくさんいるので、他の団体の利用者さんのことも考えて行動することが大切です。

キャンプを通して感じたことは、社協の人たちと連携して、キャンプを成功させるという、大学の中だけでは出来ない体験をすることが出来、障害児・者と地域の人々とのかかわりの大切さを感じました(図 11)。

そして、自分がどこまで出来るのか、何が分からいのかなど、今まで気がつかなかったことまで考えることが出来、自分の能力を知ることが出来ました。

ぜひ、興味がある方はこのつくしんぼキャンプに参加してみてください。とてもいい経験になると思います。

最後にサークル全体のまとめと課題です(図 12)。まず、まとめは、たくさんの障害者の人やそれに関わる人たちと出会い、話をすることが出来、障害児･者と触れ合うことの大切さを感じました。

そして、ともに時間を共有出来ました。さらに、サークルのメンバーで話し合いを重ねることで、サークル内での新しい発見をすることが出来ました。

ボランティアをしていく中で、地域で支え合うことの大切さを感じました。

最後に、今後の課題です(図 13)。

例会に参加している子どもたちと信頼関係を作れるようにサークルで話し合う事、障害に関する知識を身に付ける事、サークル全体で情報を共有出来るようにする事、そして、失敗や反省を次に活かせるように、資料をまとめ、振り返りをしていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました(図 14)。

つくしんぼ

社会福祉学科2年　伊藤 彩
緒方 詩織

1

つくしんぼは、30年ほどの歴史のあるサークル

社会福祉協議会と
障害児の保護者の方々が
余暇支援を目的として作った

学生がボランティアとして参加

学生主体のサークルとして
現在の形になった

2

つくしんぼってなーに??

対象：障害児

目的：保護者やこどもたちに、安心して楽しく活動できるよう、学生自ら企画を立て楽しんでもらえる会を作って交流すること

部員数
社会福祉学科25名　人間形成学科 2名
公共社会学科 3名
計30名

3

つくしんぼ年間計画

4月	あすなろ運動会
5月	新歓
	例会
6月	フレンドシップツアー
7月	例会
8月	キャンプ
9月	つくし市
10月	福祉まつり
11月	学祭
12月	例会(クリスマス会)
	追いコン
1月	例会
2月	送別会

4

地域との連携

○工夫次第で子どもも高齢者も障害のある方も楽しめる。

○同じ目標があると一致団結できる。

あすなろ運動会

5

○季節に合った遊び

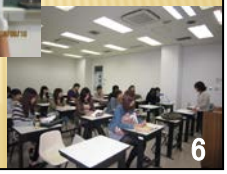
○子どもたちが理解しやすい遊び

○ゲームの道具作り

○障害や身体能力等の情報を事前に把握

○情報を学生同士で共有

○危険予測する



定例会

6

例会

○みんなで子どもの体調など
細かな変化に気づく

○みんなで安心して楽しく活動
できるようにする

○保護者の方とのコミュニケーション

○信頼関係を築く

○危険予測をする

7

フレンドシップツアー

フレンドシップツアーとは、障害があることにより、外出することが困難な方々と、ボランティアによる日帰り列車の旅のことです。

駅の階段や、道路の通行の練習を
学内で先輩から指導を受けながら練習しました。

8

フレンドシップの様子
～門司港レトロの旅～

一般の観光客の人たちもいる中・・・
楽しく、安全に旅行する！！

○車いすでの移動の困難さ
○障害を持っている人だけで旅行を
をするのは現状では難しい
○様々な制度を身を持って体感

9

つくしんぼキャンプ

社会福祉協議会が主催している
小学生から高校生までの
一般の子どもや障害児の子たちを対象とした
二泊三日のキャンプです

学生が夏休みに集まり、二週間かけて
キャンプの準備をします。

○例会での知識や経験を生かす

・危険予測
・みんなが安心して楽しく遊べる
・子どもの体調管理

○周りの状況を把握する
・ほかの団体の利用者さんのことも考えて行動する

10

キャンプを通して感じたこと

○大学の中だけではできない体験
○障害児・者と地域の人々とのかかわりの大切さ
○自分の能力を知る（自己覚知）

11

まとめ

○障害児者と触れ合うことの大切さ

○共に時間を共有できた

○サークル内での新しい発見

○地域で支えあうことの大切さ

12

今後の課題

〇子どもたちとの信頼関係づくり

〇障害に関する知識を身につける

〇サークル全体で情報を共有する

〇失敗や反省を次に生かす

13

ご清聴ありがとうございました♪

14

サークル名　　てんぷらあいす

発 表 者　社会福祉学科２年生
佐熊美樹（部長）　有田彩乃
活動分野　地域活動支援センター「ゆう」
一本松すずかけ病院
部 員 数　31 名
ミーティング　毎週火曜日 18：30～20：00　　3104 教室

こんにちは、てんぷらあいすです(図 1)。よろしくお願いします。

まず、てんぷらあいすのサークルの紹介をしたいと思います(図 2)。てんぷらあいすとは、県大で唯一の心の病を持たれている方たちとの交流を行うボランティアサークルです。

てんぷらあいすでは、県大の近くの地域活動支援センター・相談支援事業「ゆう」と、一本松すずかけ病院の精神科デイケアで活動をさせてもらっています。実際に、交流をすることで心の病を知ること、また、心の病を知ってもらうこと、そして、この経験を後輩に伝えていくことを目指しています。

毎週火曜日に学生ミーティングを行い、活動を通して感じたこと、気づいたことをみんなで話し合い、情報を共有し改善する場を設けています。

次に、てんぷらあいすの歴史についてです(図 3)。そもそもは、数名の学生が個人でボランティア活動を地域活動支援センターで行っていました。しかし、卒業などにより、徐々に学生ボランティアが減り始め、学生との交流がなくなる状態が出てきました。そこで関係に継続性をもたせ、より良い交流活動をしたいと考え、組織化し、2009 年 5 月に「てんぷらあいす」として発足しました。まだ駆け出しのサークルで、試行錯誤を繰り返していますが、現在、学内・学外の OB を含めて 31 名の部員が所属しています。

ところで、みなさん「てんぷらあいす」という名前は不思議だと思いませんか。
この名前は県大で行われる秋興祭でおなじみの「てんぷらアイス」を地域活動支援センターの方に出していただいているのですが、そこからとったものです。「てんぷらあいす」という名前は、学生とその施設のつながりを表すものにしようということで、その地域活動支援センターの利用者の方々と一緒に決めました。

てんぷらあいすの活動内容について説明します。地域活動支援センターと、一本松すずかけ病院での活動は、ご覧のようになっています(図 4)。見ておわかりの様に、平日に行われる活動も多く、講義などで参加したくてもなかなか活動に参加することが出来ない場合もあります。

また、一本松すずかけ病院の活動はしばらく途切れていましたが、春休みから活動に参加出来るように立て直しています。

私がてんぷらあいすに参加しようと思ったきっかけは、普段、精神障害の方と接する機会はないので、いい機会になると思ったからです(図 5)。

まだ活動の経験は少ないですが、その中で感じたことを発表していきたいと思います。

まず、関わり方についてです。精神障害のことについてわからないまま活動を始めることになりました。まず最初のかかわりでは、やはり活動する前は精神障害に対して少なからずネガティブなイメージがあったので、どのような話をすればいいのかといった不安がありました。

しかし、実際会ってみると、正直、どの方が利用者さんでどの方が職員さんか分からなくて、本当に障害を持たれているのかなと思ったほどでした(図 6)。また、イベントでは普段と違った表情を見ることが出来ました。スライドは筑豊緑地にピクニックに行った時の写真なのですが、とても楽しそうな表情を見ることが出来ました。

初めは、不安が大きかったのですが、このように一緒に活動することで普通に話すことが出来るようになりました(図 7)。そして、言い方は良くな

いのですが、接していく中で利用者さんも私たちと変わらない人だということが分かりました。しかし、関わっていくなかで、症状により、利用者さんが普段とは違う行動をとった時や薬の副作用などで言葉が聞き取りづらい時に、どのような対応をとればいいのかといった課題が出てきました。

次にコミュニケーション不足を感じました(図8)。声のかけ方や接し方など、自分からコミュニケーションをとっていくというのは難しいなと改めて思いました。しかし、接していく中で感じた不安や楽しかったことなどを活動中や学生ミーティングを通して共有し、利用者さんとの接し方を先輩方から学んでいきました。

学んだ内容としてはまず、定期的に関わることが大切だということがわかりました(図9)。定期的に関わることで利用者さんに名前を覚えてもらい、より親密な関係を築くことが出来るということ、安心感を持ってもらうことが出来るということを学びました。

そして、私たちは利用者さんに何かを話さなければならないと思ってしまいがちですが、逆にそれが利用者さんの負担になるかもしれないということを知り、話すことだけがコミュニケーションではない、一緒にいるだけでも関係を作ることが出来るということも学びました。

そして、利用者さんが主体になって行動してもらうということです(図10)。利用者の方に「学生さんがやって」と言われると、学生がついついすべてを行ってしまいがちです。しかし、そうではなく利用者の方が主体になって活動してもらうように考えて動くべきだということを学びました。

次に、知識についてです(図11)。講義でイメージしづらかったものが、活動を通して理解出来たものも多くあると思います。

現在、施設と病院の二つの機関で活動させてもらっていますが、講義ではそれぞれの機関の役割・目的などを学ぶことが出来ます。しかし、同じ精神障害の方の支援の機関でも目的が異なっているため、その施設の雰囲気や利用者の方の様子など、実際に現場に行ってこそ得られるものがあるということを感じました。

また、講義では学ぶことの出来ない、利用者の方の気持ちや思いに触れることも大切だと思いました。

そして、ボランティアの役割についてです(図12)。現在、ボランティアとしてどこまで関わっていいのか分からない、事業所との話し合いの場が少ないといった課題が挙げられます。

そこで、これからは利用者さんが主体となって活動できるような環境を作りつつ、私たちも活動を一緒に楽しみたいと思っています。また、自分たちが活動を通して不安に感じたことや今後の課題などを、事業所の方との話し合いの場を設けて、少しずつ改善していけたらいいなと考えています。

最後になりましたが、心の病を持たれている方は地域から孤立しがちであるということ、そして地域との交流をしようとする場を持とうとしています(図13)。これから私たちは、サークル活動でそこに関わっていけたらいいなと思います。

ご清聴ありがとうございました(図14)。

てんぷらあいす

社会福祉学科2年　佐熊　美樹
2年　有田　彩乃

1

サークル紹介

・心の病を持たれている方たちと交流するボランティアサークル
・モットー「輝いて！楽しんで！！」

2

てんぷらあいすの歴史

・発足のきっかけ
地域活動支援センターでのボランティア
⇒サークル化「てんぷらあいす」

・てんぷらあいすの名前の由来

3

活動内容

・*地域活動支援センター*

毎週水曜日：料理の会
毎週金曜日：ポリマークレイ
第1土曜日：地域交流会
他にも、季節ごとにある行事やスポーツレクリエーションなど

・*一本松すずかけ病院*
毎週月～土曜日
様々な支援プログラムのデイケアの活動

4

活動を通して

1、関わり方
（1）最初の関わり方
（最初）
- 最初話しかけるのに勇気が必要
- ネガティブなイメージ

5

- 一緒に活動をすることで・・・
・イメージが変わる
- イベントなど

普段と違った表情が見れる

6

（現在）
- 普通に話すことができるようになった
- 私たちと変わらない

（今後の課題）
- 聞き取りづらい時に何回も聞きなおしていいのか
- 利用者さんが普段と違う行動をとったときの対応の仕方

7

（2）コミュニケーション不足
- どのような話をすればいいのか
- 接し方に対する不安

ミーティング
を通して・・・
- 先輩から学ぶこと

8

- 定期的にかかわることが大切
- 話すことだけがコミュニケーションではない

9

- （3）利用者の主体性

学生がすべてを
行ってしまいがちだが・・・

- 利用者さんが主体になって活動してもらうということ
（学生に依存しない）

10

2、知識について
活動を通して・・・
- 同じ精神障害者を支援する機関でも目的の違いによって地域活動支援センターと病院で役割が異なる
- 現場に行ってこそわかる知識

11

3、ボランティアの役割について
（課題）
- どこまで関わっていいのか分からない
- 事業所等と話し合いの場が少ない

12